

---

# 薬師

小林 劼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薬師

### 【Nコード】

N8785S

### 【作者名】

小林 劔

### 【あらすじ】

クスメイアーの薬師とその名を他国にまで轟かせている、薬師クロード。賞金首にもなちゃって、本人が望んでいた薬草達に囲まれたまったり日和見生活がどんどん遠のいてく日々。それでも家族（同居人）や友人達に恵まれてのほんマイペースを貫いているものの、時にはむなしくなることもあるんです。だってその発端は、、、育毛剤。

## 0話 魔女の契

場が、静まり返っていた。

何をどうしたらいいのか、いや、そもそも何故こんな事になっているのかと、そこにいるべき者達は揃って目を瞬き、擦った。

何度も、何度も。

けれど変わらない、何も変わらない。

クスメイア王国の王都メイア、その王城は国王謁見の間。

何の前触れもなく、本当に、忽然と、国王が鎮座する王座から続く6段の階段を降りてすぐの場所に、大小2つの人影が立っていた。

20才くらいの、腰まで届く黒髪黒眼、メイド姿の整いすぎた容貌を持つ絶世の美女。

身長から10才前後と思われる、古ぼけた黒いローブで全身をすっぽり覆い、フードを目深に被って口元しか見せない子供。

どこからやって来た、とか。

どうやってこの部屋に入って来た、とか。

色々突っ込み所は満載だったけれど、とりあえず、人々は驚きで沈黙していた。

即位して4年になるが未だ風格が足りないと、年長者を始め周囲の者達から叱咤激励されている33才独身クスメイア国王リカルドは、本能で、嫌な予感というよりは面倒事の臭いを嗅ぎ付けて、思わず頬を引き攣らせた。

「王様、お手紙です」

可愛い声が、沈黙を破ってフードの下から漏れた。顔は見えないが、恐らく声の感じから少女と思われる。

ローブをごそごそといじって、若干茶色に変色してる封筒を取り出す。

隣にいたメイド姿の女性が無言でそれを受け取ると、足音1つ立

てず優雅に階段を上ってリカルドの眼前まで歩み寄り、丁寧に丁寧に、深く頭を垂れて、手紙を差し出した。

「……………クスメイア国王、リカルド…エンマイア陛下。この書状、アナタは読む義務があります。おわかりですよね？」  
につこりと、美しいその顔で微笑む。

茫然としていたリカルドは、差し出された手紙　そこに記してあった紋様に、露骨に顔を強張らせた。

無言で手紙を受け取るようプレッシャーをかけてくる美女に負けまいと、リカルドは必至に全身を固まらせて、受け取りを拒否した。

全身全霊で。

「もう一度、言いましょうか？」

凜と美しいのに、やたら冷え冷えとした声が美女メイドから紡がれる。顔は微笑んでいるが、目は笑っていないかった。

「きよ、拒否す　「アナタに拒否権はありません」

ごくりと生唾を飲み込んでから出した声は、ずっぱりと切り捨てられる。

「それとも、現状を見て、更に敵を増やしますか？　それは一国の主たる国王として正しい判断では　「脅しちゃダメだよ」

にここに告げる美女メイドの冷たい科白を、可愛い声が遮った。

「王様。ただのお手紙です。それを読んで、どう判断を下すかは、アナタの自由です。というか、読んでもらわないと、困ります」

少女は全く空気を呼んでいなかった。

そのあまりに暢気な声に、周囲の人の思考回路がやっと繋がった、というか正常に動いた。

「へ…陛下に対して無礼なっ！」

階段下、少女に1番近い所にいた近衛兵士が声を上げる。

「……………暴言と、判断します」

殺意の滲む言葉とともに、ゆらり、と美女が振り返った。

その視線に、ひっ、と声を上げて腰を抜かす近衛。

「……………仮にもクスメイアの国王間近に仕える者として、この程度でへたれるとは情けないですね」

「脅しちゃダメだってば。視線に殺気込めちゃダメ。喧嘩しに来たんじゃないんだよ？」

「申し訳ございません」

あつさりと纏う殺気を和らげて、リカルドを振り返る。

「受け取っていただけますね？」

あくまでにつこりと。

「……………今、我が国はそれどころではないのだが」

「受け取っていただけますね？」

笑顔で繰り返した姿に、リカルドは渋々と煮え切らない顔のまま、手紙を受け取った。

それに満足げに微笑むと、再び一礼し、階段を降りて行く。

受け取ったコレ、どうしよう。本気でリカルドはそんな顔をしていた。

「……………陛下？」

すぐ傍に控えていた、老人が恐る恐るといった風に声を上げる。

「ああ、待て」

本気で疲れた声でリカルドが答え、意を決したように口を引き結ぶと、封を切った。

手紙を広げて、目を通す。

険しい顔のリカルドの目が、本当に、点になった。

何度も、何度も、それを読み返す。

「馬鹿な」

ぼんやりと、リカルドは呟いた。

「ダメですか？」

少女が不安げに問い掛ける。

「いや、ダメというか…」

わかっているだろうが、今、戦

争中なのだが？」

「はい、わかっていますけど」

「それなのに、わざわざ危険を冒して？」

「危険ですか？」

きよとん、と返った声に、リカルドは言葉を失った。

何と説明したらいいんだろう、自然と目が宙を漂う。

手元の手紙には、本当に短い文面しか記されていないかった。

#### 全部略。

何代目かは知らないが、クスメイア国王へ。

すまんが、居住まいを与えて、国民として扱ってやってくれ。

本人が面倒をかける事はないだろうが、軍部や宮仕えにはするな。

それと書くまでもないだろうが、出生はバラすな。伏せる。

お前が後悔する事になるから。

じゃ、よろしく。

……………どうしろと！？

リカルドは必至で脳内反芻した。

何で自分が王の時に、と思った。

何でこのタイミングで、と思った。

面倒をかける事はないって、今この状態がすでに面倒事になってるよ！？ と、本気で思った。

「……………ねえ、今、危険なの？」

ちらりと隣に佇む姿を仰ぎ見る。

「我々に及ぶ危険など、ある筈ありません」

揺ぎ無い自信に満ちた声が返った。

「でも、王様心配してくれてるみたいだよ？」

「いいえ、アレは違うでしょう。恐らく、戦争中のこの非常事態に、何を面倒事と思ってている筈です」

的確なその指摘にリカルドはギクリとするも、残された国王としてのプライドか顔には出なかった。

「そっか、戦争してるからか。……じゃあ、王様。戦争が終わったらしいですか？」

はい？

リカルドは思わずトボケタ顔で、小さなフード姿を眺めた。

「王様。戦争が終わったなら、いいですよね？」

もう一度問い掛ける声を反芻し、重々しく頷く。

「ああ、そつだな。そつちが片付けば問題ない」

リカルドはその立場にあるまじき事を考えた。

戦争が終結したら、速攻で退位して、息子はいないから面倒は全部、弟に任せて

「ちよつと行つて来ようか」

しまおう、という言葉は、少女の暢気な声に遮られた。

「どこへなりともご一緒致します」

穏やかに微笑んで頷き、

「ええと、場所はどこだったかな」

呟きながら少女が右手を視線の高さまで持つていくと、人差し指をくるくる回す。

「国境のケイザ草原あたりが、現在、戦闘区域でしょう」

「ケイザねー」

声にあわせて、ぎゅるっと、少女の指から溢れるようにして、水が舞った。

突然の事に言葉を飲む周囲を余所に、水は少女の少し頭上で円形を取って留まり、そこに映像を映し出した。

「流石。ばつちりだね」

「恐れ入ります」

満足そうな声を示すように、水に映ったのは草原で、白に赤い紋章を掲げた軍と、蒼に黄色と緑で書かれた紋章を掲げた軍とが、まさに、戦争中だった。

「……み、水鏡っ!？」

驚きの声が上がったが、それすらも放置して。

「それじゃ王様、これ、終わらせてきますね」

まるで買物にでも出かけるように、近所に遊びに行くかのよう  
に告げられた声。

「え、ちよ、待つ……」

動揺しきつたりカルドの声は、届きたい主には届かなかった。

“水鏡”と呼ばれたそれより視線を更に下げた時、そこに、既に  
2人の姿はなく。

「んな阿呆な……」

茫然とした国王の声を合図とするかのように、“水鏡”が消え失  
せた。

「陛下？」

「ああ、もうっ！ どーすんだコレ！？ だ、誰かつ、キリウを呼  
べー！！ 大至急！」

「ここに。陛下」

すぐ傍でした若い男の声に、リカルドはびくつと王にあるまじき  
反応を示した。

「い、いつからいた！？」

「魔力の反応が陛下のすぐ傍でしたものですから。遅かったよう  
ですが、ご無事で何よりです。尤も、危険な反応ではなかった  
ので、

気にする必要もないかと思いましたが」

「…………… 心臓に悪い登場の仕方するな！ つーかざらりと酷っ！？  
気付いてたなら来いよ、仕事サボんなー！！」

「今更？」

「今更ゆーな！ つーか、何に對してだ、それっ！？」

「陛下、混乱の余り言葉が乱れて地が出ております」

「わかってんなら説教してねーでやれよっ！」

誰も付いて行けない空気の中、33才とは思えないリカルドの叫  
び声が響き渡った。

「幾つになっても子供のままだですね、アナタは」

肩であからさまな溜息を吐き出す姿に、

「お前のが8つも年下じゃねーか!」

リカルドは品位のかけらもない突っ込みを返す。

「落ち着きが足りないかと存じます、陛下。ともかく、“水鏡”です。ケイザ草原の状況など、もう10日以上変わらないのですかね」

「動いて欲しくないが動くだろうよ」

あきれ返った声に肩を竦めて、キリウは左手を翳した。

“水鏡”で戦場を移し、視線をリカルドへと。

「して、何をご覧になりたいのですか。陛下」

「わかつて聞いてるだろ、お前？」

「ええ」

あっさりと頷き、軽く左手を振ると、移されている場面が切り替わり 本当に、それは、異常としか思えない光景を移し出した。

戦場の、ど真ん中に、先ほど目の前にいた筈の2人が暢気に立っている。

メイド姿とローブ姿と。

ローブ姿はともかくとして 身長が戦に出るには足りないだろうが メイド姿はない。ありえない。

「……………終わった」

脱力して、リカルドは呟く。

「小さいなりに強力な結界が有りますね、中々有能な御仁のようです。まさにパーフェクトメイドですね」

キリウの感嘆した声に、リカルドは頭を掻き耑りたくなった。

「おや？ 小さいコが動きますか」

その科白に、がばっとリカルドが顔を上げ“水鏡”を凝視するよっに見つめ “水鏡”が弾け飛んだ。

「ぶっ！ 何だ、どーしたっ!」

「覗き見を赦さないレベルで、魔法が展開されたみたいですねえ」  
暢気な声に、リカルドの顔が蒼白になって力なく落ちる。

その姿に、戦場にいた兵士達の死を察した他の者達も動揺に顔色を変えた。

しかし、その場を殲滅したところで、それはただの一時凌ぎに過ぎない、そうリカルドが苦々しくも冷静に判断した瞬間、

「これは面白い」

キリウの心底そう思っているのであろう声が届いた。

訝しむように顔を上げたりカルドの目に映ったのは、再び構成された“水鏡”。

いや、それよりも問題なのは、まるで一場面を切り取ったかのよう、動きを止めた両軍の兵だった。

「……………止めてるのか？」

「いいえ、現実に、あちらではこのような状態になっているようですね」

ひらひらと左手をキリウが振ると、場面が変わる。

くるくると変わる場面は、いずれも同じだった。

動きが止まっている。

表情を見れば、困惑。

両軍とも。

「ケイザ草原で戦闘中の両軍の動きを丸々止めるとは、縛る魔法にしても規模も威力も尋常ではありませんねえ」

1人暢気なキリウの双眸は、本当に愉しそうだった。

「音を届けられないのが残念ですが、まあ、当事者が戻ってから聞けばよいでしょう」

「……………戻るって？」

「素敵な殺し文句を口にされました」

「……………何だつて？」

問いに対して薄笑みを返す姿に、リカルドの背を冷たい物が走り抜ける。

「今、お聞きになりたいですか？」

意味ありげに笑うキリウに、聞かない方がいいのではと思う反面、

心底愉しそうな笑みを浮かべる理由に興味を引かれない訳もなく、どの道、後で聞くなら、今この場で聞いても同じじゃないか、と悩んだ末に結論付けて、

「ああ」

と、掠れた声で頷く。

その答えに、にこやかに微笑むと、それでは、と前置きして、周囲に未だ茫然と佇む姿を一望し、

「クスメイア、ならばに、センザリ。双方に現在進行中のこの戦争は、ここで終結する事。大人しく両軍引きなさい」

淡々と告げるキリウに、場の空気の温度が下がった。

「アナタ方の命は現在、私が握っています。身にしてみても理解している事と思います。ゆえに、大人しく引かないのであれば、この場で全員、死んでもらいます」

空気は、零下になった。

「更に、なおも戦争を続けるのであれば、先に仕掛けた方々に、死んでもらいます。無論、国ごと。尤も、停戦に伴う和平交渉は、国家間で勝手にやって下さい。そちらには感知しません」

絶対零度に静まった、国王謁見の間。

翌日、双方の国から揃って終戦宣言が出される。

それから僅か5日という短い期間でもってクスメイア国とセンザリ国との間で、和平条約が結ばれた。

過去300年近くに渡り、数十年ごとに繰り返されてきた戦争。現在、何度目になるかわからないそれは余りにも情けない、否、あつけない幕切れを迎える事となった。

そうして結ばれた二国間の和平条約は、通称“魔女の契”と呼ばれた。

## 1話 薬師クロード1

北にシリオン大陸、南にキリオン大陸、両大陸間の大海に横たわるようにある小さな諸島群、それがこの世界の地図。

人間、魔族、精霊、竜、言い出したら切りがないほど雑多な人種が住まう世界。

そんな世界は、500年近く前、真つ二つに別れて争っていた。

大陸間戦争と後々語られる事になるこの戦争は、元々、国を介して相容れる事のなかった、北と南の大陸、その間で起こった。

事の起こりは、キリオン大陸からの、シリオン大陸最南端の土地を持つマグリ国への侵攻だった。

北の大地には人間が、南の大地には魔族と、世界最大数を誇る2種族がそれぞれ住み別けていた当時、魔王を筆頭とした魔族が、人に対して、否、彼等の住む大陸から尤も近いマグリ国に対して起こした戦争が、全ての始まり。

何を思い、当時の魔王がそれを始めたのかはわからない。

始めは、海を越えてやってくる魔王を筆頭としたキリオン軍と、迎え撃つマグリ軍との争いだった。

別に当時の魔王は、世界征服なんぞ掲げてはいなかった。

けれども、侵攻の理由は謎のまま。

そうした状況において、1年を待たずに、マグリ国はキリオン軍の、魔王の傘下となる。

黙っていたなかったのはその周辺諸国だった。

元より友好国として助力していた西のトレマー国を筆頭に「魔王帰れ！」コールが高らかに叫ばれるようになる。

幾人もの人々が、魔王、そしてキリオン軍討伐へと乗り出した。

馬鹿な話に聞こえるかもしれないが、魔王は賞金首にもなった。

ぶつちぎりの文句ナシでシリオン大陸最高額の数字が踊り狂い、魔王の部下の幾人かにも賞金がかけられたりもした。

こうして魔王、もとい、キリオン軍のシリオン大陸侵攻は、世界を2分するまでに至った。

表と裏で。

それでも、誰も、魔王を討てず。

立ち向かって行った者達が帰る事はなく。

旧マグリ国は、キリオン領と呼ばれ植民地となり、誰も取り戻す事が出来ず。

人々が諦めかけたその頃、タイミングよく、むしろ作られたお伽噺のように、シリオン大陸の東方にある小国の王子が、部下10名に満たない少数部隊を率いて、魔王討伐に乗り出した。

王位継承権第一位にあったその王子がどういった経緯で、そんな事になったのか、詳細は伝わっていない。

当時国王だった父親も、国の重鎮達も、揃って口を閉ざした。しかしてこの王子。

何をどうやったのか、国を出て半年も経たない内にキリオン領を解放、マグリ国へと返還してみせた。

その後、経路は不明のままだが、キリオン大陸へと乗り込み、魔王を倒してしまったのである。

彼の王子が国を出てから1年ほどで、大陸間戦争は終結し、王子は英雄と歌われた。

だが、凱旋帰国を待ち望んだ国民の声も空しく、王子は帰らぬ人だった。

国王も重鎮達も、落胆の色を隠さなかった。

結局、王位は弟が継いだのだが、たったの8名の部下とともに戦場を駆け抜け、魔王軍を悉く打ち破り、シリオン大陸に平和を齎した彼の王子は、今に至るまで、尤も有名な英雄として歴史に名を残している。

その名は、レグ・エンマイア。

シリオン大陸東の外れと言うには半端な位置にある、自然豊かで

鉦山が有名な、クスメイア国の王子であった。

キリオン軍の侵攻によって一致団結した、シリオン大陸。英雄レグの働きによって平和が齎された、シリオン大陸。

しかし、シリオン大陸のそんな平和は100年を待たずに、キリオン軍の侵攻以前の形　　シリオン大陸に点在する国々との争いへと戻っていた。

クスメイア国は、というよりも、シリオン大陸の東方がわりと暢気な土地柄なせいとか、大きな争いはなかった。そもそも魔王を倒した人間を出した国がある、そうそう戦争をしかけようと思う者もいなかったのだろう。

けれども。

クスメイア国の西にある、センザリ国。

双方の国で、本当に些細な、本当に下らない理由から、争いが生じ　　それが戦火となった。

そもそもの発端は1年経たずに失われてしまったものの、互いに出してしまった矛は、既に引くに引けない状態になっていた。

血は血を呼び、争いは争いに塗れた。

戦争をすれば国が疲弊する、そうなれば自然と戦火は小さくなった。

しかし時を経て力を蓄えて来ると、また、些細なきっかけで戦火は大きくなった。

そんな事を繰り返して289年後。

まさに交戦中のさなかに横槍を入れた存在によって、無理矢理、戦争は終局を迎えさせられた。

それから更に、13年。

現在のクスメイア国は、小さな争いや、個人間での喧嘩などはあるものの、至って、平和である。

クスミア国、王都ミア。

大きく東西に別れる特色を見せる街だが、王城から真つ直ぐ南に抜ける大通り　ミア通りと、その両脇に並ぶ店舗はいつも賑やかだ。

その王都ミアの西側、大通りから外れて行けば閑静な住宅街

　　と言えは聞こえはいいが、街中から外へとかけて、主に農業従事者が多く住んでいるため牧場や畑が目立ち、東側に比べて大都市色はかなり薄い。というかぶつちゃけ、王都とは思えないくらい田舎である。

　　そもそも、街を囲む塀を西門から抜けた途端に、山道入り口というレベルだから仕方ないのかもしれないが。

　　ミア通りから2本、西に入った路地にある、カフェ“マギン”は、地元密着の知る人ぞ知る名店。飲食ともに文句ナシに美味しいのは勿論だが、店主の見た目と人柄も固定客を繋ぎ止めている理由の1つだ。

「いらつしゃいませ……と、ヒーちゃんか。こんにちは」

　　来客を告げるベルがドアから聞こえた店主がお決まりの科白を口にしてカウンター越しに振り返れば、立っていたのは大小見知った2人の姿。

　　小さい方は、黒髪黒眼の10代後半くらいに見える可愛らしい少女。大きい方は、銀髪灰眼の30代半ばで風貌にそぐわない色白美肌のいかつい男。

「こんにちは、ドルトルさん」

「こんにちは」

　　片や朗らかに、片やぶつきらぼうに、それぞれ挨拶を返して、カウンターへと歩み寄る。

「昨日、連絡貰った追加分、持ってきたよ」

「本当？ 早いね、助かるよ」

「こちらこそだよ。ヨギがミルク買いに行くついで荷物持っていくらうて言うから、いつもより大目だったりする」

「ますます嬉しいね、それ。ヨギさんも有り難う」

「別に大した事じゃない」

満面の笑みで会話する2人を余所に、いかつい男　ヨギが、やはりぶつきらぼうに答えて、手にしていた大きい籠をカウンターに置いた。

「ヨギは照れやさんだから」

「まあ、もう慣れたけどね」

無言で差し出された籠を受け取りながら、店主　ドルトルは苦笑した。

「それじゃ、オレはこれで」

「うん。ヨギ、有り難うね」

「ヨギさん、お疲れ様でした」

「別に大した事じゃない」

お決まりの科白を口にしてヨギは踵を返した。その背を見送っていた2人に、

「で、その到着を待っていた顧客がここにいるんだが」

ぼりぼりと、淋しい頭をかきながらカウンターに座っていた男が口を挟んだ。

「はい、すぐに用意しますね」

受け取った籠をカウンターの向こうに下ろして品物を確認するドルトル。

「毎度有り難う、リッシュさん」

「こつちこそだな、ヒイル。お前さんは本当に腕のいい薬師だ。身近で格安で手に入るオレは幸せもんだな」

にやりと笑う姿に、少女　ヒイルは、軽く眉を上げ、

「リッシュさんなら直売もするのに」

顔は笑っているものの拗ねた口調で返した。

「月一なら行けるけどな、毎週通える距離じゃねえよ。こうして、昼飯食うついでに買ってんだから」

「リツシュさんの造る魔具は優秀だから、忙しいのは仕方ないね。ん〜…………配達できたらいいけど、そうするとメイアを東西横断になっちゃうし。それって最初に決めた規定を曲げるから、鼻屑になっちゃうもんねえ」

「いつもの事だな。オレもこのためだけに工房引越す気はねーし。ま、しょーがねえな、そこは。お互いの生業上」

肩を竦めるリツシュに、

「リツシュ・クルーヴの魔具師としての腕は、クスメイア随一」

にやりと笑ってヒイルはそんな事を口にした。

魔具 魔法使いが使う装具が代表的だが、それ以外にも、魔力の伝導が必要な作業に使われる道具は全てこれに部類する。

ヒイルが言ったように、この、一見いかついだけの禿オヤジは、クスメイアで1、2位を争うと言われる腕前を持つ魔具師であった。

魔具や魔法、鍛冶関連の住いや工房は王都メイアの北東部 鉦

山に程近い場所 に集中して点在している。

「そんな事を言う、ヒイル・クロードは、押しも押されぬクスメイアの薬師」

ふふん、とリツシュは笑った。

薬師 そのままなので説明は要らないだろうが、医者とは当然区別される。主に魔法使いが片手間に作業して、何らかの薬を作るのが一般的で、稀に、医者と共同作業をしている者もいる。

王宮仕えで日々薬の研究に勤しむ研究者としての薬師はいるが、ヒイルは薬を作る事を生業としている紛れもない個人経営の薬師だ。当然のように、数多くの薬草を育てる必要性が出てくるため、ヒイルの住いは、西側にある。

正確に言うと、ギリギリで街の“外”。西の門を抜けると山越えの道に突入するのだが、右手に小道の分岐路があり、ゆるやかなそ

の坂を登っていった先に、ヒイルの家はあった。旅人が間違えないよう、分岐路に“これより先、私有地”とかかれた看板が置いてあったりもする。

「はいはい。お互いに褒めあうのもいいですけど、そのくらいでひよっこりと顔を出したドルトルが話を止めた。

「ドルトルさん、今回は50ね。値段は同じで」

「わかりました。価格は1つ5000シル、数は50、確かに預かりました」

この世界の通貨単位は、シル。

普通の宿に一泊するのに平均4000〜5000シルかかるので、割と高額に部類する薬である。

「宜しく願います」

笑顔のヒイルに、微笑みを返して、リツシュに向き直る。

「お待たせしました、リツシュさん。ご注文の品です」

ドルトルが肩を竦めて、緑色の10センチほどの小瓶を2つ差し出した。

「あんがとさん」

どしゃりと皮袋を置いて、お金を差し出し、瓶を受け取った。

「直売の方が、500シル安いんですけどね。うちとしては嬉しいですが、リツシュさん、ヒーちゃんとは顔見知りなんだから、わざわざウチの店を介さなくてもいいのに」

「マスターにも世話になってるから、いーんだよ。それくらい。それにさつきも言ったように、暇がねえ」

「直売は、家まで来てくれた人のみって決めてるから、まあ、しょうがないよね」

「まあ、ウチとしても、この薬目当てのお客さん、クスメイアの有名人が訪れる店って事で、お陰で繁盛してますけどね」

「またまたあ」

ヒイルとリツシュの声が重なった。

「謙遜しちゃって、マスター」

「間違いなく、ここはメイアで1番美味しい店だよ。知らない人は損してるよね〜」

「お茶の方の種類も味も、メイア」

「ドルトルさんの人柄も、固定客をがちり掴んで離さない。“マギン”のサービス、メイア」

「何より、マスターいい男。銀髪青眼長身瘦躯、優しい雰囲気で心を癒す39才。しかも美人の嫁さん付き」

「2人とも、そこまでおだてても何も出ませんから」

「「と、言いつつ、お茶が出てるよ」」

突っ込みはハモった。

「これはいらつしやった皆様に出しています。それに、お茶の葉は半分以上、ヒーちゃんが育てたものでしょう。しかも趣味で」

にこやかに微笑む。

言葉を詰まらせたヒールの背後で来訪を告げるベルが鳴り、ドルトルは仕事へと戻って行った。

## 1話 薬師クロード2

注文を取りに行く姿を眺めながらお茶をすするヒールに、そういえば、とリツシユが口を開いた。

「……………依頼の品、出来てんだけど。いつ取りに来るんだ？」

“マギン”の名物でもある、鶏肉サンドを食べるのを再開して、問い掛ける。

「あ、うん。中々ねーこう、時間の都合が。メリア広過ぎだよー」

「一応、王都だから仕方ねーな」

「だねえ…。近いうちには思ってるんだけどさ。夜になっちゃうとマズイでしょ、やっぱり？」

「オレは別にかまわんが、東の方は夜は物騒だからな。貴族連中が多く住んでる分、仕方ねーけど。まあ、取りに来るっつーなら、開けとくが？」

「それは何か悪い気がするけど」

「時間不当な依頼なんかザラだから気にすんなって。ま、ヒールは朝早いから、寝るのも早そうだが」

「あはは、基本的にはね。でも、夜にしか取れないのもあるから、起きてる時もあるよ」

「それは仕事で起きてるんだろ？ 街の反対側まで来る余裕あるか？」

「あつたら、出来たって聞いてすぐに取りにいつてるよ」

「だろーな。もう2週間だ」

「うっ…」

「ウチも基本、配達はしてねーんだが。何ならマスターに預けとくか？」

「んんっ、確かに、“マギン”には薬の納入があるから、3日に1度は来るけど。物が物だからねえ。ドルトルさんに預けておいて、何かあつたら迷惑かけちゃうし。……………今日か、明日に取りに行く

よ。夜になっちゃおうと思うけど」

「わかった」

「鐘9つまでには、行くね」

「……………大丈夫なのか、そんな時間に出歩いてて？」

「余り遅くなるようなら、ヨギと一緒に行くよ」

「それなら問題ねーか。んじゃ、用意しとくわ」

「うん、有り難う」

「気にすんなって。こちらこそ毎度どーもだ。とはいえ、お前の要求する魔具は毎回、難易度が高くて骨が折れるがな」

「うっ、ごめん」

「嫌味で言ったんじゃないわ、やりがいがありまくるからな。本当に。しかし、装具は珍しいよな、どういう風の吹き回しだ？」

「あ、うん。色々あってねー」

「賞金首はご苦労様ってヤツか？」

「うっ、……………毒薬なんて作ってないのに」

「いや、利害関係だろ、どう考えても。お前の作ったこの薬のせいで」

にやにや笑うリツシュは、先ほど買い上げた緑の小瓶を小突いた。

「そんなモノで命狙われるなんて哀しすぎるよ」

がっくりとカウンターに突っ伏す。

「それだけ、利用者が多いし、人の要望に叶ってるって事だ。ま、オレとしてもかなーり有り難い」

へらりと笑ってリツシュは薄くなった自分の頭を撫でる。

「マスター見て、効果はばっちりわかるもんな」

鳥肉サンドをテーブルへと運ぶ姿を眺めて、しみじみとリツシュは呟いた。

同じようにその背を顧みて、

「たかが髪の毛、されど髪の毛ってね……………」

ヒールは諦めたようにぼやいた。

そう、個人経営の薬師など、普通なら犯罪スレスレというか犯罪に手を貸すくらいでないかと、成り立たない。毒物作ってナンボの職業だ。大金が転がり込むが、厄介事にも同時に巻き込まれる。

それなのに、ヒイルがそういつた薬を作らずとも経営を成り立たせている理由。

そして、クスメイヤーの薬師とまで呼ばれるようになった所以。育毛剤。

多くの人が、失われた髪の毛を取り戻したいと願っていた。裕福な人は特に、そうでない人も。

当然のように、供給元が多いとなれば、需要する側には大金が転がり込む。そのため、育毛剤の研究は、かなり昔から進められていた。

育毛剤の研究成果は、ある意味では上がっていたと言える。

だが、尤もポピュラーだったモノは、全身の毛が濃くなるというものだった。

少し大金を払えば、もう少しまともな、上半身だけ濃くなるというものがあつた。

つまり、頭の毛だけを増やす、そして生やす、そういった薬はこれまででなかつたのである。

ヒイルが育毛剤に手を出したのは4年前で、きっかけはドルトル。

その半年ほど前にドルトルの息子が病に臥した。王都メイアにいる医者達が扱う薬は、全て王宮に仕える薬師達の調合したモノだったが、医者達は揃って匙を投げた。

薬がない、と。

そんな中、動物の医者だったメイアの東の外れに住む男から話を聞いたドルトルの妻がダメ元でヒイルを尋ねた。医者 of 診断書と、病気の具合を聞いて、ヒイルの調合した薬が無事に効いて病は完治した。

その経緯があつて、時折、ヒイルはメイアの中ほどにある“マギ

ン”へ足を運ぶようになる。“マギン”で配達はしていないが、パンの持ち帰りサービスをしているため、それを求めて。

その当時、ドルトルの頭は、まだ若いのに、大変淋しくなっていた。

顔が整っている分、髪の毛の薄さは本当に致命的だった。

その悩みを打ち明けられたのが4年前。

そうしてヒイルは育毛剤の研究に入るのだが、元々、母親が作った除毛剤　これだけでも、広まれば随分な収入になったのだがの製法が頭に入っていたため、逆転の発想だよね、と試行錯誤を指してする必要もなく、完成させてしまった。

始まりはドルトル。

ほどなくして毛が豊かになっていく“マギン”の店主ドルトルに、周囲から質問が殺到する。

返った答えに、ヒイルへの依頼が増えたのは言うまでもなく。

口コミで育毛剤の話は広まり、大して時を待たずに、卸売りの希望者が連日押しかけるようになり、対応に時間を避けないと、きっかけになったドルトルの店にだけ卸売りをすると決めた。

そうしてから、今度はクサイ人間が顔を出すようになる。

他にも卸せ、製法を教えろといった脅迫の数々。しかし、そういった人間は、悉く、本当に悉く、返り討ちにされていた。ヒイル以外の住人達に。

そうしてる間に、薬師クロードという名はクスメイヤーと呼ばれるようになっていた。育毛剤だけで。

で、結局。

その人間では埒があかないと判断されたのか、本格的に裏家業の人間がやってくるようになる。

そうして、晴れて薬師クロードは賞金首となった。嬉しくないが。

当然のように、そういった方々も、返り討ちにされていたため、裏家業の方でも本腰を入れざるを得なくなり、依頼する側も自棄に

なったのか、賞金額は面白いくらいにうなぎ上りだった。  
そうして、現在。

育毛剤だけでクスメイヤーと呼ばれ他国にまでその名を轟かせるようになった薬師クロードは、シリオン大陸東方諸国における暗殺ギルド内でも有名な高額賞金首になっていた。

哀れ。

「ごちそーさん」

ほろりと哀愁を漂わせるヒイルを横目に、リツシュが食事を終えて席を立つ。

「ヒイル。品物用意しておくからな。元気、出せ？ なっちまったもんはしょーがねえ」

「……………うん」

カウンターに項垂れたまま、顔だけを巡らせて頷いた。

それに苦笑を返したリツシュは、肩をぽん、と叩いて“マギン”を出て行った。

はぁ、と溜息を吐き出すヒイルに、かちゃり、と2杯目のお茶が出される。

「ドルトルさん？」

「サービスです。伝言も頼まれてましたし、それを飲む代わりに聞いて下さい」

苦笑する姿に、ヒイルは眉を顰めたまま躰を起こすと、遠慮なく差し出されたカップに手を伸ばした。

「“クエンロッド”が動くそうです」

びく、とヒイルの眉が上がる。

「……………誰から？」

「“キー”から、注意するようにと。それしか聞いてませんけどね」

「そっか。わかった」

「少し、責任を感じますよ。僕は」

「何でドルトルさんが？」

「だってヒーちゃんがそんな厄介事に巻き込まれるようになった原因、育毛剤のせいじゃないですか。それって元を辿れば、僕が発端な訳だし」

「違うでしょ。そういう事を考える人が悪いの、全部。ドルトルさんは悪くない。正統な依頼の元、薬師がそれをこなした。ただ、それだけなんだから」

「まあ、そうなんですけどね……………」

苦笑すると、ヨギが最初に手渡した籠をカウンターに乗せる。

「そんな訳でコレ、皆さんで召し上がって、頑張ってください。僕にはこれくらいしか出来ませんから」

差し出された籠を受け取ったヒイルは、そんな科白に蓋を開くと中には、委託の代金以外に、パンが入っていた。

「わ、有り難う。カーマが喜ぶよ」

「いえいえ。ヒーちゃん達に何かあったら困るの、僕だけじゃありませんからね」

「そう言ってもらえると、薬師冥利に付きますっ!!」

満面の笑みで答えて籠を抱えると、席を立つ。

「お茶、ご馳走様でした」

「いえいえ。お粗末様でした。また、3日後に」

「はい、毎度有り難うございます」

ぺこりと一礼して、ヒイルは“マギン”を後にした。

## 1話 薬師クロード3

日が西に傾きかけて赤く染まり始めた頃、ヒイルは配達用の籠を手に通りを歩いていった。

中央のメИА通りを堺に、東西にわかれる王都メИА。そのメИА通りと平行するように、何本かの通りが置かれているが、尤も西側を縦断している通称、馬場通り。馬が荷台を引く姿が多々目撃され、国が抱える馬の牧場が北の外れにあるためそう呼ばれている。を、ヒイルは歩いていった。

メИА通りとは違い、こちらは、農耕関係の軒やが多く連なる、メИА西部のメインストリートだ。

その中の1つ、“ラーラ亭”と書かれた看板の前で立ち止まると、それを潜って店内へと入った。

「いらつしゃい。……えっと、カナッツの実の収穫はまだ先だよ？」

入るなり、若い男にそう声をかけられてヒイルは苦笑する。

「南の方の天候が余り良くないから遅れそうだって先週聞いたから、それはまだだつてわかつてるよ」

「そっか」

入ってすぐにカウンターのあるこの店。

店内の奥の壁には、幾つか紙が貼られ、それを眺めている人物が3名ほどいる。

“ラーラ亭”は、情報屋だ。

ただ、その有様は、メИА通りに幾つかある一般的な情報屋とは異なる。

ここで取り扱う情報というのは、どこそこの農場で人手が不足していて人員募集中とか、どこぞで何が収穫出来たとか、収穫物の売り値やら買値、どこぞで生まれた動物の里親募集とか、そんな内容ばかりだ。

正確に言つと情報屋ではないのだろうが、西部密着型である事だけは確かだ。

「……………ああ、配達？」

視線を落とし、カウンターの脇に立ったヒールが手にしていた籠に気付いてそう問い掛ける。

「うん。今日はルイジさんなんだね」

「まーね。ああ、姉貴が兄貴に用だった？　つーかヒールちゃんが配達つて言つと、姉貴くらいしか思いつかないけどさ」

“ラーラ亭”は、店名の由来となっている長女ラーラ、長男リτζ、次男ルイジと、姉弟3人が交代し昼夜を問わずに店舗を開けている、珍しい店だ。

尤も、明け方に新情報が入る事の多い酪農関連地域。無理もないのかもしれないが。

「“ラーラの葉”、届に来たんだけど」

その科白に、一瞬、ルイジの目が細くなったが、すぐに、困つたように笑つた。

「姉貴がお世話になってます」

「いえいえ。お得意様ですから。個人の好みに合わせた特注のお茶の葉つて、原材料に値段は思いつきり左右されるけど、ここだけの話、ラーラさんの注文の品は有り難いんです。材料費は高いですけど、作るのは割と楽なので」

照れ笑いをするヒールに、

「アレを育てるのが楽なのは、ヒールちゃんが、薬草関係詳しいからだと思つんだけどなー」

呆れ返つた声をルイジは上げる。以前、かなり値が張つたその植物を株分け購入した姉が、教えてもらった通りに育てていたにも関わらず物の見事に枯らしたのを見ていたからだ。

「うーん。希少価値の高い花ですけど、普通より少し気を使ってあげれば真つ当に育つはずなんですけどね」

2度試して、2度とも枯らしてしまつてから、ラーラは栽培を諦

めた。

「まあ、姉貴に育てられる花は、5日くらい水やり忘れても大丈夫なくらいじゃないと」

ルイジの評価に、ヒイルは曖昧な笑みを返す。

「割と几帳面だと思っただけだね、ラーラさん」

「几帳面なのは、書類の上だけ。面倒を見るつてのが、あの人は苦手なんだよ。オレ達、両親早くに亡くしてるけど、本来なら親代わりになっても可笑しくない10も離れた姉貴に世話してもらった覚えないんだから。オレの親代わりは、隣の配送屋のおっちゃんとおばちゃんと、兄貴だけ」

「そ、そうなんですか？ 意外」

「そうなんだよ、困った事に。あ、そーだ。カナッツの実の収穫の情報入ったら、連絡するよ。このタイミングだと、次の配達前になりそうだし、わざわざ何度も足を運んでもらうのも悪いからさ」

「それは私の方が悪い気がするけど」

「いやいや、仕入れまで任せてもらってるし、どんと来いだね」

「じゃ、お言葉に甘えて、お願いしちゃいます」

「了解。んじゃ、このくらいで」

肩を疎めると、カウンターの端に移動して台を押し上げて通り抜けられるようにする。

「配達ご苦労様。んで、いつもんとこに宜しく」

「わかりました」

空いたスペースを通り抜けてカウンターの内側に入ると、

「お邪魔します」

挨拶をして、正面            カウンターの裏側            にある扉を開いた。

「遠慮なくどうぞ」

そこから先は、“ラーラ亭”の住居スペースになる。

居住まいは基本的に2階だが、台所を始めとした水周りは1階、店舗の裏側と、店を営む家にはよくある造りだ。

ヒイルはそのまま左折して狭い廊下を真っ直ぐ突き当たりまで歩くと、壁に手を当てて深呼吸を1つ。

「ラーラの葉」

小さな声で呟くと、行き止まりだった筈の壁がその先へと開く。続くのは地下へと降りる階段だ。

折り返して総計18段ある階段を降り切ると、取っ手のついた扉が立ちはだかる。

コンコン、とノックをし、ヒイルは反応を待った。

暫くしてから、どうぞ、と男の声が届き、ヒイルは取っ手を回す。

「……………ヒイル？」

男の疑問符が、扉を閉じるヒイルの背にかけられた。

「こんにちは。“ラーラの葉”、お届けに上がりました」

「いつも有り難うねー」

暢気に答えたのは女の声だった。

それに振り返りながらヒイルはあたりを見回す、相変わらず薄暗い部屋だ。6畳にも満たないその部屋にあるのは、ヒイルから見るとほぼ真横に位置する小さなカウンター代わりの机が1つだけ。

その机の隣で椅子に座った黒いローブを来た金髪の30才前後の女性が、横座りになってヒイルを眺めていた。

「お客さんは？」

問い掛けながら、カウンターの正面へと周り込む。

「ん、今日は昼過ぎに1組だけ。まあ、本番はこれからだし？」

「そっか」

軽い相槌を打って箆をカウンターに乗せる。

「“ラーラの葉”。それと、ミリアムとカナンを持参してみた」

「……………おやおや？ んゝ聞いたのかな？」

「うん」

「そかそか。メイアの貴族令嬢御用達の薬師クロード製高額美容剤2点とは、奮発したね」

「等価交換、ね」

肩を竦めるヒイルに、にんまりとした笑みを浮かべる。

「どこからどこまで聞きたいのかな？ いやいや、待って。ヒイルと腹の探り合いしても意味ないか。必要な事しか言わないもんね、あんたは。何も引き出せないんだっけ」

「ヘタに自分の話して、それに値段付けられて売り買いされる訳にはいきませんから」

「本当、トボけてるくせに、ヘンなトコだけ、世慣れしてるんだから」

「お陰様で」

苦笑するヒイル。

以前、お茶を飲みながら話をしていて、美容関係の話になった事がある。日焼け止め効果の薬は酪農を営む女性達からの依頼で作っていたし、別に隠してもいなかったのだが、それ以外の、化粧品に部類する薬は販売していなかった。そういうのも一応作ってるんだけどね、と口にしたら、それが知らない内に情報として売られていた。お陰で、そっち関連の薬の依頼が東側に住んでいる 所謂 貴族の令嬢から入った。それだけなら良かったのだが、その後、喜ぶべきなのか哀しむべきなのかわからないくらいに、依頼が殺到した。

真面目に、肌 directly 塗布する薬なので、材料も値が張る上に、作るのにエライ手間と神経を使う。

そのため先ほど口にした、ミリアムとカナンという2種類以外は、東側にある化粧品の販売店に作り方を教えて、そこへ卸す薬草で収入を得ている。1人2人くらいなら自分で作っていた方がよほど儲かったのだが、供給に需要が追いつかないからと泣く泣くそういう形を取らざるを得なかった。

どうせなら考えて売ってくれたらよかったのに、と思わないでもないが、買い手がいる限り、その情報売るのが情報屋である。文句を言っても仕方ない。

そんな経験をしたのだ、学習しない訳がなかった。

ただでさえ、今のヒールは命に値段が付けられている身。些細な事でも、値段が付くに違いないし、手の内を晒したくもなかった。

「んじゃ、その分の代価ね。まずはお値段。2000万シルになりました、おめでとー」

あっけらかんと告げられた科白に、ヒールの頬が引き攣った。

## 1話 薬師クロード4

ばちばちぱちつと大仰に拍手しながら、

「一気に4倍、凄い跳ね上がり方っ」

「って、ちよ……待って！ 幾ら何でもありえないでしょ、それ。

どこをどうやったたら、500そこそこが一気に桁まで変わっちゃうの!？」

「またまたあ。身に覚えあるでしょ？ キーワードは、ジルイ王子

」

ヒイルはカウンターに突っ伏した。

「半年前の、南方視察の際に起こった王子暗殺事件。その一月前に、薬物混入ね。はい、解毒剤は誰が作ったのか？ 王宮の薬師では手に負えず、調査したのは一般の薬師。流石、クスメイアーの薬師の名は伊達じゃありません、ヒイル・クロード」

「……そんな話まで流れてるの？」

「情報屋舐めないで下さいな。これで生きてる人間よ？ 情報が命を繋いでるんだから。……で、話を戻して暗殺事件。首謀者は捕まりましたが、共謀者は吐かず、というか取り調べ前に殺された。まともにやっても、王子の護衛は伊達ではないし、キリウ・テイリウスがいる限り、困難極まりない。そう判断したからこそ、彼らは毒を使った。にもかかわらず、それすらも防がれた。だから直接狙ってみたけど、やっぱり予想通り、阻まれた。そこで、どこぞの誰ともわからない、その共謀者は考えた」

「どこが1番崩しやすいか、って事？」

「そう、正解。白羽の矢を当てるのは、簡単だった。国の保護を直接受けてない、一般の薬師。しかもすでに賞金首。その薬師がいなくなれば、毒が使える。以前失敗したものと、種類は当然違っただろうけどね」

「……それで、2000万？」

「そう。よほどお金持ちなのねえ。シリオン大陸全体は網羅できてないと思うけど、有名所は抑えてるつもり。その中でも、単独で大陸中8番目の高額賞金。ついに、1桁にまで登りつめちゃったわね」

「嬉しくない……」

「し、か、も、“クエンロッド”」

「そこが動く理由はそうじゃないかなって思ったけど、金額が有り得ない」

「あ、自覚あったんだ？」

「その毒物、作った人はそのギルドの人だつてわかった時点で、可能性としては考えた。でもさ、今、その薬師指名手配中だけど半年以上経つのに捕まらない上に、誰が入れたのか犯人未だにわからないんだよ？」

「まあ、実績、人材、表との繋がりが特殊な“クエンロッド”。組織形態も他の暗殺ギルドとは全く違うし、その関係者は表と裏の顔を持つ者が大半って言われてるからね。本拠地のあるカメレイアスには国の上層部にも関係者がいるって噂だし」

「…………… 本当、関わりたくないナンバー1だね」

「そ、噂は伊達じゃないって事。こっちもね」

「面倒だなあ」

唇を尖らせて不満そうな声を上げるヒールに、苦笑が返る。

「それ、面倒で済ませられるあんたは大物だよ」

「だつてさ。誰が来たつて、勝てる訳ないんだし」

「出た、強気発言。ん、でもま、実際、今までは悉く塞いでるわね。あんたのこの2枚盾」

「…………… 盾つて」

「じゃ、護衛？」

「家族つて言つて欲しいな。血縁関係はないけど、完全に身内だもん」

「そーお？ どーかんがえても、ズレてるあんたの保護者っぽいん

「ただ。売り買い家事その他、仕切ってるの、カーマでしょ？」

「まあ、うん…。カーマのお陰で営業成り立ってるし、生活出来るけど」

「あんた、薬作るだけだもんねー。まともな料理1つ作れないし。ま、何から何まで1人で出来ちゃってたら、妬みそねみも多くなるだろうから、そのくらいで丁度いいのかもね」

「……………馬鹿にされてる気がする」

「薬師としての腕は認めてるわよ」

「それだけ、でしょ？」

「それ以外何があるのよ？」

「あっさりと返されて、はあ、とヒールは溜息し項垂れる。

「“呪令の魔女”」

「ぼそつと言われた科白に、ヒールが勢いよく顔を上げた。

「……………聞き間違い？ “呪令の魔女” って聞こえたんだけど」

「言ったわよ。金額分とトントんくらいしゃべった気がするけど、表も世話になってるからサービスね」

「“クエンロッド”に入ってたの？ 単独かと思ってたけど…」

「ん〜。詳細はわかんないけど、薬の売買と、その名の通り操りの方面で、協力関係にはあつたつて話は聞いた事がある。多分、その過程で、正規メンバーになったんだろうね。過去、“呪令の魔女”への暗殺依頼とその後の取り消しが、私の知る限り5回ほど。ん〜通り名に恥じず、魔法使いとしての腕はかなりいいんだろっね〜」

「……………そりゃ、自分の家から一步も出ずに、距離関係なく他者を操り、他者を呪えるって言われてるくらいだもん」

「おや、よく知ってるね？ 科白取られたよ」

「有名でしょ。カメレイアス最北端の森に住む魔女、森に立ち入った者は正気で戻れないと言われる、狂いの森の主」

「まーね。ま、何せ“クエンロッド”だから。有名所がごろごろ、賞金首もごろごろ抱えてるトコだし」

「本当に厄介だね…」

「あら、しゃべり過ぎちゃった。……ま、いつか。ヒイルに何かあったら、私も困るもんね」

「嬉しいやら哀しいやら。そう思うなら、もう少し協力して。というか、こっち寄りになって情報流してくれてもいいんじゃないかなー？」

「それは無理。“マギン”に伝言頼んだってだけで、十分サービスなんだから」

「……そりゃ、そうかもだけどさあ」

「この業界、信用第一だからね」

「裏の情報のやりとりで、信用ねえ」

「裏だからこそ、よ。眉唾物つかませたら、さくつと命落とす業界なんだから」

「何でそんな危険な事してるんだか」

呆れた声を上げるヒイルに、

「称に合ってたから。それしか言えないわねー」

あっさりと返した。

「さて、話はここまで。コレ、有り難うね」

「いえいえ。ん……珍しく随分と話してくれたから、お礼に私も情報流しておこうかな」

その科白に、ほくほく顔で瓶を手にした所で硬直する。

「め、珍しいわね……？」

「不確定要素が入ってるけどね」

肩を竦めて返し、驚いている顔をヒイルは真顔で眺める。

「私、ヒイル・クロードは、呪われてる」

「やっぱり？」

あっさりと、そんな声が返った。

「や、やっぱりって何？ 驚いてくれてもいい話だと思っただけどー！」

「え？ だって、あんたが呪われてるってんなら納得だわ。外身も中身も大人になれない呪い」

「酷っ!? 何それー! そんな呪いじゃないし、っていうか、そんな呪いがないと思うっ!」

「だってさあ、いや、あなたの作る美容剤が優秀なのはわかってるけど、ちよつと度が過ぎるわよ。黙ってれば10代後半、口を開けたらヘタしたら成人してない子供よ?」

「15才未満扱いされたっ!」

この世界、15才が成人とされる年齢である。

「そういう反応するからー」

「ひ、酷い……。もうとっくに成人してるし、20代だもん」

「全然全く微塵も見えないから。見た目だけなら可愛いからいいんだけど、中身がまんまお子様なんだもん、あなた。どう頑張ったって20代じゃないわよ。色気ゼロだし。まあ、薬師として堂々と営業してるから未成年じゃないってのはわかるけどさ」

自営業は勝手に店を開けて売買していいという訳ではない。裏業界ではある話だったりもするが、表立って商売をするには、成人という年齢条件が始めにあり、その土地の支配者 国や領主に申請し、それが受理されて始めて営業可能なのだ。

「うっ、酷い……」

「で? 否定するって事は違っんでしょ。どんな呪いにかかってんのよ、あなた?」

「切り替え早いなあ」

「そりゃ、本人が情報くれるっていうんだから。貰っわよ、売れる内容だといんだけど」

「その判断はご自由にどうぞ。………んっとな、正確に言つと、

私自身が呪われてるって訳じゃなくて、呪われてるのは、名前」

「………ヒール・クロード?」

こくり、と頷きが返る。

「何でそんな名前乗ってるのよ。改名したらいいじゃない」

「自分に危害は全くないから、かな。早い話が、この名前を悪用すると呪われるっていう呪いがかかってたりする」

「や、ややこしいわね……。っていつかどこの物好きよ、そんな特殊な呪いかけるの」

「カーマ曰く、心配性の保護者」

「……………何故か凄く納得出来たわ。ええと、つまり……………何かしら語りとかで呪われたりする？」

「どうだろう？ 不確定って言ったでしょ？ 今も効果が続いてるかどうかもわかんないの。呪われた人に最後に会ったの、10年くらい前だから。その人は、私の名前使って、無銭飲食しようとしたらしい」

物凄く間抜けな話だった。

「で、苦情言いに来たんだけど。かけたの私じゃないし、解けなくて。その後ずっと研究はしてるんだけど、解呪には至ってない」  
「その呪われた人はどーなったの？ 死んだ？ それともまさか、あんたの家にいる2人のうちのどっちかじゃないでしょーね」

「呪いは解けないってわかって、実家に帰った。それまで流れて雇われ傭兵みたいな事してたらしいんだけどね」

「何ていうか、哀れね。まあ、命に別状はないんだ？」

「うん」

「ま、命を奪うとかだと、余計な恨み買っちゃうもんね。賢いんだか、そうじゃないんだか。凄く下らないけど、ある意味では有効な呪いだわ」

「そう思う？」

「聞いた事ないけどね、そういう半端な呪い。効果範囲は物凄く広いのに、割と中身は単純。表現が難しいけど、何ていうか、考えたヤツは天才ね。ある意味」

「……………ラーラって凄いやね、そういうトコ」

思わず感嘆と呟いたヒイルはギロリと睨まれた。

「……、どこだと思ってるわけ？」

「……………ああ、ごめんごめん」

「ま、いいわ。その話、買っとく。お代は何かいいかしらね？」

「余計に話してもらった分の埋め合わせのつもりだったんだけど。断言出来るものでもないから」

「あ、そっか。今も効果があるかどうかわからないんだけどね。じや、ありがたく受け取っとくわ」

「いえいえ。またのご利用をお待ちしてます、表の方に」

「こっちは裏表ともに、ご利用待ってるわよ。賞金首さん」

にんまりと笑っての科白に、うっ、とヒイルは言葉を詰まらせた。

「もういいや……しょうがないし。いい話、聞かせてくれてありがと」

諦め切った口調になったヒイルにクスクス笑い返すと首元の布を引っ張り上げて口元を覆うとフードを被る。

「どういたしまして、ヒイル」

簡潔に返った科白は、男の声だった。

「情報屋、キー。何度見ても男の人だね、そうしてると」

「対魔装具の効果だな。声色は自分で変えてるだけだが、性差の調べは受付けんよ」

「口調も変わるし」

「オカマの情報屋も面白そうだが、真面目に仕事はしてるんでね」

「名前を売るなら、そういう異色なものも有りなんじゃない？」

「すでにセンザリにいるからな。有名なのが」

「そーなんだ？ まあ、私知ってるこっちの情報屋ってキーくらいだから。それで十分だけどね」

「光荣だな」

短く返った科白に肩を竦めて返すと、ヒイルは机を離れる。

「またね、キー」

言いながら扉を開いたヒイルに、

「ああ、ヒイル。気をつけるよ」

そんな声がかけられた。

「了解」

片手を上げて答えてから部屋を後にした。

階段を上がって“ラーラ亭”へ戻ったヒイルは、カウンターにいたルイジに挨拶をして店を出る。

自宅へ帰るには右折だが、ヒイルは左折した。

“呪令の魔女”が動くと聞いた以上、取れる対策は全て講じておく必要がある。

昼間伝えた時間にはまだまだ早いが、リツシュの工房を訪れて頼んでおいた品物を持ち帰る事にした。

## 2話 依頼1

夕食後、話があると2人を引きとめたヒールが“クエンロッド”さらには“呪令の魔女”が動くと聞いたことを伝えると、

「面倒な……」

そろって同じ科白が返ってきた。

「だよねえ」

げんなりと呟いて紅茶を飲み干す。

「そういうわけだから、ヨギ、これ付けといてね」

言いながら、足元においてあった皮袋の中から20センチ四方の小箱を取り出すとヨギに差し出し、

「わかった」

中身が何かも聞いてないというのに一つ返事で頷いて受け取る。

「それとカーマ」

「はい？」

「先出しは駄目だよ」

ちらりと視線を送った先には色気漂うヒールとは間逆に位置する美女　カーマが哀愁を漂わせながら右手を頬に添えて、小さく溜息。

「駄目ですか？」

少し切れ長の藍色の瞳で上目遣い　身長差の関係上目線はカーマの方が上なのだが　に見つめる。普通の男ならころりといってしまうのだが、ヒールに効果などあるはずもなく無言で首を左右に振り返す。

「でも面倒ですよね？」

「そうだけど、先出しは駄目。私達は一般人なんだから」

一般人、に力を込めたヒールに、カーマとヨギはそろってあいまいな笑みを浮かべた。

2000万シルの賞金首が一般人って……てなもんである。

「わかりました」

仕方ない、といった風な息を吐き出して頷く。

「でも、外の防御は強化しておいてかまいませんね？」

「うん。それはお願い。相手が相手だから、直接攻撃はないだろうけど何してくるかわからないしねえ」

「かしこまりました」

「迷惑をかける」

「ヨギは気にしなくていいの。家族を守るために行動するのは当たり前だし、悪いのは相手の方なんだから」

最後の科白に初めて不満を滲ませると、気を取り直すようにヒールは立ち上がった。

「じゃ、話はこれでおしまい。明日の配達分の最終確認してくるね」

「はい。明日は鐘3つからです」

「ありがとう、カーマ」

「いいえ」

「クラマガのところへ行くときは声をかけてくれ」

「うん。ありがとう、ヨギ」

「別に大した事じゃない」

2人の返事を聞いてから、さきほどまでしていた物騒な話など忘れたかのように鼻歌交じりでリビングを後にするヒール。

扉が閉じられるのを待って、カーマは、ふう、と息を吐き出した。

「ああ、面倒……。どうせ無駄なのに」  
ぼつりと呟く。

「全くだ。柵が直ったばかりだというのに」

世界に名だたる暗殺ギルドが動くというのに、場違いなコメントをする2人。

「でもまあ、仕方ありません。ヒールがああ言った以上、こちらから手を出すわけにはいきませんもの」

「そつだな」

「ヨギ」

「ん？」

「それ、きちんと身に付けておいてくださいね」

「ああ。……ところでコレは何だ？」

至極今更な質問だった。しかも聞いた相手は渡した相手とは別である。

「簡単に言えば対魔のお守りです。直接的なら意味をなさなくとも、それ以外には無防備でしょう？」

「なるほど。迷惑をかけるな」

「気にははいけません。ヒールも言っていたでしょう？ 私達は同じ屋根の下に住む家族。身内を心配するのは当然です」

「だが……高そうだ」

事実だ、と続けようとしたヨギだったが、言いながら小箱の蓋を開いたため、目に入ったその感想が口を付いていた。

「高そう、ではなく、高いですよ。市場に出せば、そうとうな値段が付くでしょうね。その辺のモノとは石の質が違いすぎますから何故か我がことのように胸をはるカーマ。

小箱の中には2つのアイテム。共通しているのは、大小の差はあれど黒い石がはめ込まれているということ。

取り出してみせたヨギに、カーマは小さく肩を竦める。

「本当なら一番望ましい形があるのに、持ち主の意向にそってそれをしていないヒールは流石ですね……」

「どういうことだ？」

両手に一つずつ持ったそれは、指輪と腕輪。

「だって、ヨギ。あなた、耳のそれは決してはずさないでしょう？ 返るのは無言。肯定を意味するそれ。

「本当は両耳が一番よいのです。脳に近いですし、自身が聞き取ったと判断していなくても耳には色々な音が届いていますから」

「……そうなのか」

「ええ」

「ヒールには世話になってばかりだ」

「その点に関しては、お互い様です。あなたは納得しないかもしれませんが、ヒールや私にとっては、そういう範囲ですよ」

柔らかな笑みを浮かべるカーマに、ヨギは苦笑する。

「ありがたく頂戴する」

「ええ、そうしてください」

カーマの言葉を聴きながら、先の進言通り、右手に指輪、左上腕に腕輪をはめる。

「なるほど。剣の邪魔にならず、心臓に近い位置、か」

ぼつりと呟いた科白に、カーマは満足げに微笑む。

「それでは片付けと、準備をすませてしましましょうか。“呪令の魔女”と呼ばれるくらいですから、どんな呪いをかけてくるのか楽しみですね」

くすくすと笑う妖艶なる美女は、どうみても悪巧みをする悪女であつた。

「ああ、カーマ」

「はい？」

「薬草園の周りは念入りに」

「心得てます」

真顔で見詰め合う2人。

「此度の面倒からも、薬草園だけは死守だな」

「勿論です。ヒールの一番大切なモノですから」

硬く頷きあう。

自覚ゼロののほほん娘であるヒールが、そのまま笑顔でいられるように。

「困いも補強しておこう。武力で来るかもしれないからな」

「そうですね、手駒というのも考えられますし…」

思案するような仕草をカーマがとるとほぼ同じくして、ぱちんつ、と何かはじける音が当たりに響いた。

「あら」

「早いな…。見てくるとしよう」

「お願いします。ヨギ」

「何だ？」

「もし相手が人であったなら、相手をせず連絡を。魔法使用の可能性が高いですから」

「わかった」

返事をし、足早に去っていく。

「……………魔力がほとんどないのに、本当にヨギって人間離れしてるわね」

建物が古くてどんなにそおつと歩いても床が音を立てる家なのだが、彼だけは、歩いていようが走っていようが足音が全くない。一番体重が重い筈なのに、だ。ヒールでさえ普段はぱたと音を立って歩いているというのに。

更に言うと、気配もほとんど感じさせないため、なおさら性質が悪い。

「敵には回したくないわねえ……」

ぽつりと呟いたカーマだったが、2人が本気で争うようなことになればヨギでは傷どころか指一本すら触れられず敗れ去ることは明白なのだ。

「さて、洗い物を先にすませてしましましょうか」

侵入者があつたというのに、何とも暢気なカーマであった。

## 2話 依頼2

「なんだこれ」

右手で摘み上げたそれを見て、ヨギは眉間に皺を寄せる。

みたこともない生き物だ。蝙蝠に似ているが、毛が生えている。

短くてもふもふした茶色い毛が全身にびっしりと。そして閉じられては要るがその瞼のサイズから大きいとわかる瞳。頬から左右にようにと伸びる6本の髭。

「ヨギ。子供じゃないんだから、何でも素手でつかんじやだめだよ」

苦笑した声に振り返れば夜着に身を包んだヒイルが目に入り、

「そんな格好で外に出たらカーマに怒られると思うが」

「……………忘れて」

「わかった」

何とも単純な男である。

「で、それ。捨てといて。敷地の外に」

「……………いいのか？」

「うん。使い魔みたいだから、多分、“呪令の魔女”が“クエンロツド”のだと思うし」

「…埋めといた方がいいんじゃない？」

「手間だし、面倒でしょ？」

「まあ、な」

「じゃ、ぽいつとやっちゃって」

遠投のスイングをしつつ笑うヒイルに、何の返事もなくヨギは思いつきり放り投げた。

街とは反対の山の方へむかって。

「あ……………凄い飛んだね」

「別に大した事じゃない」

「ここでも使うんだ、という突っ込みもなく、」

「んじゃ家に帰ろうか。それにしても動き早いねえ」

「だな」

両方の言葉に、一言で頷くヨギ。  
歩いて裏口へと向かう途中で、

「ヒール」

「ん？」

「ありがとう」

「…どうしたの？」

「いや、これのお礼を言っただけ」

「ああ。別にいいのに」

「だが、そうとうしたんだらう？」

「ん？ んー。まあ、加工と対魔力のための細工はリツシュさんから安くはないけど。腕は確かだし、効果が見合っていないと意味ないから」

「だから、だ」

「いやいや。そんなの、ヨギが無事でこれからも仲良く生活できるなら安いもんだよ」

へらりと笑うヒールに、ちょっとだけその金銭感覚が心配になったヨギだった。カーマがいるから無問題だが。

「それにヨギが心配してるほど高くないよ。石は市場で買ってきた不純物混じりまくってた安い水晶だから」

「…そう、なのか？」

安い水晶というわりには、黒光して高級感あふれる漆黒なのだが。「カーマが不純物を除去して、2人で魔力込めたらそうだったの」  
色々物凄く納得したヨギだった。

配達用の籠を片手に、軽い足取りでヒールは扉を開いた。

「こんにちは」

「いらつしゃい。…と、ヒーちゃんか」

「配達に来ました。後、パンを持ち帰りです。いつもの数お願いします」

「はい。毎度ありがとうございます」

「こちらこそ」

カウンター越しに籠を手渡す、通例行事。

「数は30、価格は同じで」

「わかりました」

頷きながら、ヒイルにカップを差し出すドルトル。

「ああ、おいしい」

一口含んでから、満足げに呟く。

キーから情報を仕入れて早3日。話を聞いた日の晩に珍妙な来客があつて以降、ヒイルの周囲はいたつて静かだった。

油断しているわけではないが相手の出方をまっぴから動く決めていたので、特段変わった行動を何一つとらずに日々を過ごしている。過ごせてしまっている。

と、背後に人の気配を感じ、カップを手にしたまま肩越しに振り返り、

「無言で女性の背後に立つのはどんな場面でもいただけないと思いますよ?」

その人物を見上げる。

旅人風の若い男。強面の堅物であると告げる風貌で、こげ茶色の髪に眉間に軽くしわを寄せた青い目でヒイルを見下ろしている。

ヨギと同じ年くらいかなあ、などと思いながら、こくりともう一口。緊張感はず。はたから見ると、少女を睨み付ける凶暴な男の図、なのだが。

「失礼。…薬師クロードの使いの者か?」

「だとしたら?」

息を呑んだドルトルとは裏腹に、暢気に問い返すヒイル。

「聞きたい事があるから、会わせて欲しい」

「直接家にいけない理由でもあるの？ 場所なら、こっちの情報屋ならどこでも聞ける」

「聞いた。だが…」

苦虫を噛み潰したような渋い顔になり、

「すまん。オレの名は、ロヘイア・カーグ。知人の娘がある病気になり、苦しんでいる。医者は匙を投げた。近くの町の医者も同様に他にも何人にも 「薬師と医者は別物だよ」

普段のヒイルを知っている人物からは想像も付かないほど単調な声がロヘイアの科白をさえぎる。

「それをわかった上で言ってるの？」

「わかっている。だが、このクスメイアーと言われるその腕なら、あるいはと思い」

「そう。つまりそーいう話をして、断られたって事か。薬師と医者を混同している人には教えない規約になってるもんねえ」

へろりと頷く。

「で？ 会ってどうしようっていうの」

「薬を作れるか否か、尋ねたい」

「ふうん…。その娘さんは、何の病気なの？」

それは普通の問いかけなのだが、何故かロヘイアの顔がこわばった。

何となく、病名を先に言わないあたりにクサイものを感じていたヒイルだったが、公の場で言えない病なのか、ただの口実なのか、どちらだろうかと思案する。

「少し、はばかられる…」

「そ。わかった。じゃ、家に帰ってから詳しい話を聞く事にするよ。こうしてわざわざ私が来るのを待ってたくらいだから。ちょっとばかり情報が歪んでるみたいだけどねえ」

「会わせてくれるのか！」

途端、ロヘイアが嬉しそうに声を上げた。

「あー、うん。いや、っていうかもう会ってるし？」

「…は？」

「ああ、私名乗ってなかったよねえ。初めまして、私がお探しのヒール・クロードです」

にこりと微笑んで名乗るヒールに、口をあんぐりと開けて間抜けな顔を返した。

「“マギン”のパンを買って返らないといけないから、そっちの準備が出来るまで待っててね」

固まったままの口ヘイアをそのままに、くるりと向き直ると、

「ドルトルさん、確認大丈夫？」

「え、ええ。はい。確かに30受け取りました」

「はい、お願いします」

独りマイペースを貫くヒール。そんな姿にドルトルは小さく肩を竦めて返すと、

「すぐ用意しますね。それと、そちらの方。いつまでもそんなところに立っていないで、どうぞお座り下さい」

ヒールの隣の席を指し示して告げると、呆然とした様子の口ヘイアの返事を待たずにカウンターの下へと姿を消した。

「……………ねえ、いつまで私の背後に立ってるつもりなの？」

げんなりと呟いた。殺気など微塵もないのだが、驚愕の視線を背にひしひしと感じ続けるというのも落ち着かないものである。

「あ、ああ」

小さな声が返り、隣に移動した口ヘイアは、腰がぬけたかのようにどっかりと椅子に座った。

「いやいや、そこまで驚くことかなー？」

「……………クスメイアーというので、かなり高齢の人物を想像していた」  
「勝手な想像と違っていたからってそこまで驚く、普通？」

「男だとも思っていた」

「それにしても、だよ」

「……………まさかこんなに幼かったとは」

「子供じゃないし!!」

暢気に受け答えしていたヒイルだったが、幼い、に反応して力いっぱい叫んだ。

「子供とは言っていない」

「幼いって何よ、幼いって！ 失礼にもほどがあるー！」

「……………まだ10代だろう？ いや、成人してから店を構えた事を考えれば、すでにクスメイヤーと呼ばれているのだから天才と云うべきか」

「失礼なっ！ 私は20代で 「馬鹿な」

眉間に皺付きの驚愕した顔で、ヒイルを上から下まで眺め、

「ないな」

呟く。

それは至極一般論で、10人が10人同じ答えに、それが例え10倍1000倍に膨れ上がろうとも、答えは変わらないだろう。

「……………酷い」

しくしくと頂垂れるヒイル。初対面の人間には必ず言われるし、実年齢を聞いても誰も信用してくれないのも毎度の事なので、最早涙するしかない。

どんなに頑張ったって、20代には見えないのだ。それがヒイル・クロードなのだ。仕方ない。

「どうせ小さいし、童顔だし……………」

ぶつぶつ呟く。確かにそれらも要因の一つではあるのだが、最大の理由は己の言動だと気づく気配は全くない。指摘されても直せない時点で諦めるしかない、何せ本人は見た目のせいだと思いついでいるのだから。

「ヒーちゃん、元気だして。僕はヒーちゃん、可愛いし素敵だと思うよ」

「ドルトルさん……………」

ほろり、と少し浮上するヒイル。

「薬のお代と、入っていたメモのパンを入れておきました。お釣りも……………」

「有難う」

一気に復活し、ほくほく顔で籠を受け取る。  
そのまま店を後にしようとして、

「あ、ごめん。えーと、ロヘイアさん？ 付いてきてね」

「……………ああ」

立ち上がりかけた姿勢で頷いたロヘイアは、最初についたごめんの科白にやはり忘れていたのかとちょっとだけ幸先が不安になった。

## 2話 依頼3

少し頬を染めて、どきまぎしながら視線を彷徨わせる。あからさまに挙動不審なロヘイアだったが、対面に座る2人は完全スルーだ。何せ2人にとっては見慣れた姿。

「それで、ロヘイアさん、とおっしゃいましたか。ヒイルにどういったご用件なんでしょうか？ 薬と言われましても実際にその症状を見るか、医師の診断書でもないと思うのですが」

「あ、はい。その…」

まっすぐに自分を見つめて話すカーマに、鼓動が収まらないロヘイア。これまで見たこともないレベルの美女を前に、豪華な衣装ではなく普通の町娘と変わらぬ井出達だというのが更に悪いのか、思考が定まらない。

独身男として当然の反応だ。多分。と、ロヘイアは内心呟く。

「とりあえず、人前じゃ言い難いって病名は？ そこから始めようよ。キリがないもん。男の人ってカーマを見るとたいいていこうなるし」

ぐはっ、ロヘイアは精神的ダメージを受けた。

「それもそうですね。落ち着けるよう、お茶をもう一杯お持ちしましょうか」

そう言っって席を立つカーマ。

思わずその姿を目でおいかけろヘイアに、

「それで、病名は？ っていうか、はーるばる来たのに本来の目的忘れて女の人眺めてるって恥ずかしくないの？」

「……………すまん」

謝るしかなかった。

「で？」

催促するヒイルに、手元のカップの冷めてしまった紅茶を一気に飲み干す。

「もし、無理だったら無理と言ってくれてかまわない」

「そういう判断は後でしょ」

「確かに」

苦笑し、まっすぐにヒールを見つめる。

先ほどカーマに見とれていた男と同一人物とは思えないほど真剣な、初対面の時のあの顔で。

「シロイ病」

ロヘアの告げた病に、ヒールの眉間に少しだけ皺がよった。

「なるほど。それなら、人目を気にしても仕方ないね」

“シロイ病”。

その病の一目瞭然の特徴から付いた病名。

全身の色が徐々に抜けて白くなる病で色が抜けるのにあわせて体も弱っていき、発祥からおよそ5〜8年で全身が白くなり指の一本も動かせなくなつて死に至る。

その進行速度は非常にゆっくりで気づき難く、気づいた時には手遅れというのがほとんどだ。

最初にその症例が報告されたのは30年ほど前、シリオン大陸南東部。

伝染病とも土地病とも言われ、多くの医師や薬師が匙をなげた難病だ。

それにより多くの差別が生まれ、数多くの命を奪った人だけが侵される病。

唯一の救いは十数年ほど前に治療法が確立し、不治の病ではなくなつたという事。

それでも伝染する病であるため患者に対して医師の数は不足し、また治療にも相応の時間がかかるため難病には変わりなく。今なお多くの人の命を奪い続けている。

更に通常の接触 対面し、会話するなど ではうつらないと証明されているのだが、偏見が残っているため、自身や身近に“シロイ病”の患者がいた場合それを隠すのも常だった。

「でもさ、その治療なら、ラシャークの方で確立してたでしょ？  
医者もあつちには何人もいる筈だし、専用の設備も整ってる。ロ  
ヘイアさん、少し南方の訛りがあるから王都のこつちへ来るより近  
かったんじゃないかと思うんだけど」

出身地にまつわる話は一つも口にしていないのにずばり言われて、  
ロヘイアの顔が引き攣った。

「よく、わかつたな…」

「いや、わかるでしょ。そもそもその病気、クスメイアとラシャー  
クの国境あたりに広がってるんだし」

でなければ、土地病などという噂も広がらない。

「詳しいんだな」

「そのあたり、旅したことあるからね」

あつさり告げたヒイルに、どんな物好きだコイツという視線を返  
すロヘイア。失礼なヤツである。

「勉強しにいったんだよ」

何を、とは言わなかった。

それでも、ロヘイアは思わず立ち上がり前のめりになる。

「それならっ…！」

「早まらないですよ。私の質問に答えてないし、第一、私は医者じゃ  
ないんだよ。それを忘れてない？」

じと目で睨まれて腰を下ろした。

「それで、何でこつちの方まで？」

「薬をもら　「来た目的じゃなくて、そうせざるを得なかった理由  
を聞いてるんだけど」

単調に告げてから冷めてしまった紅茶を飲み干す。

「そもそも、“シロイ病”に関しては国を挙げて治療にあたってる。  
治療費だつて国が出してるから無料だし、症状が軽ければ薬で何と  
かなるから無料でもらえる薬で治せる筈。末期になれば施設に入ら  
ないといけないけれど、それだつてお金はかからない」

「詳しいんだな」

「当たり前でしょ。でないとなしに行つたのかわからないじゃない」  
「治療を……ああ、いや。はじめから話そう。正直、あまり話したくない情けない話なんだが」

「どういう事？」

「知らないって事は、それだけで罪って話だ」

「……………格好つけてるなら、帰ってもらつてかまわないよ」

「あ、いや。その……………すまない。つまり、当時のオレ達は何も知らなかつたんだ。山の中じゃないが、辺鄙なトコにある小さい村で、でも村中知り合いで、何も無いトコだけど、平和だった。ほとんどが農業に従事してるようなトコで、リルナ……ああ、その娘の名前なんだが、リルナは元気で働き者で村中の人気者だった。仕事だつて大人にまけないくらい立派にやつてのけてたんだが……………いつ頃からか、ぽかをやらかすようになった。最初は、おつちよこちよいですがせてたんだが……………だんだんそれが増えてきて、これまで平気だった重労働ができなくなつてきた。それで、おかしいって話になつて、村に医者はいなかつたから、隣の町まで行って見てもらったんだ。最初はただ疲れがたまつてるだけだつて言われたんだが……………」

空になつたカップを両手で握り締め、顔に後悔を滲ませる。

「色が、抜け始めてきた。髪が日に焼けて薄くなつたのかななんて言つてたんだが、その割に、肌は白くなつてきてた。太陽の下で焼ける筈なのに、どんどん白くなつていつて、それで、その可能性に思い至つた。うつる可能性なんかゼロに近かつたから、全く考えも付かなかつた」

「それで？」

「隣の医者に相談して、ちょっと離れてるがでかい街の医者を紹介してもらつた。過去にも何人か助けられてるって聞いて。そこでもらった薬を飲み始めて、症状がおさまつてきた」

「最初の段階だね。薬が効いてる証拠」

「でも、そこから治る様子もないけど悪化する様子もなかつた。治療には長い時間がかかるって聞いてたから、そういうもんだと思つ

てたんだ。でも…1年が過ぎた頃、おかしいって気づいたんだ」

「どういう事？話を聞いた限りだと、症状は初期段階だから、そのくらい飲み続けたら完治まではいかなくてもその手前くらいまでは回復してる筈だよ」

「色が抜けてたんだよ」

「え…？」

「本当にゆっくり過ぎて、身近にいたオレ達は気付かなかった。王都に出稼ぎにきてる知り合いが久しぶりに帰って来て、おかしいって言うまで、疑問にすら思わなかった。治ると信じて疑ってなかった」

その頃を思い出しているのか、自嘲の笑みを浮かべる。

「それで薬を出してる街医者に詰め寄ったら、そんな筈はないと。時間はかかるが、必ず治るから大丈夫だと。…もし自分達が信用できないなら余所で薬をもらうことにしてもかまわない、自分達は今後一切関知しないともし言われ。余所であつたって、通える範囲で薬がもらえるのはそこだけだったし、謝って、また薬を出してもらえよう頼んだ。その時、余所へ行つてたら、こんなことにはならなかつたんだろうけどな」

「つまり…その医者が」

「そう、偽物をよこしてた」

ほとんど無表情に近い顔で話を聞いていたヒールの眉間に皺が寄る。

「最初は本物だった。信用させるために。で、偽物と本物を混ぜるようになって、最後には偽物だけだった。リルナが歩けなくなって、大金払って調べた結果がそれだった。結果が出る頃には、もう体で自分で起こせなくなつて、薬だけじゃ治療は無理だと言われた。施設に入らなければ、と」

「ラシャークの施設なら、優先して入れてもらえる筈。どうしてすぐにそうしなかったの？」

「金がなかった」

「は？」

「無料、なんだよな。全部」

「え、あ、うん」

「薬も」

「うん……。って、まさか」

「高い金払ってた。隣町の元患者は無料で薬を貰ってたって聞いてたから、変だと思って聞いてみたんだが、薬はラシャークから輸入しているからその分の税と輸送代が入っているとわかれて納得しちまった」

「なるほど。全部国持ちって知らなければ、そういうものだと思うよね。他の品は全部かかってるし」

「ああ」

「いや、でもさ、施設は無料で入れる訳だし」「手形」

ぼつり、と呟いた口へエアに、ヒールの動きが止まる。

国境を越えた事がないため、出入国の際に必要なその存在をすっかり失念していた。

「手形、高いもんね……。その、リルナさんは無料で貰えるけど、家族は別だから」

「ああ」

「……その医者、吊るし上げないと」

「それはもうやった。首飛んで別のヤツってか元々そこにいた医者が戻ってきて、薬をきちんとしたの出してもらえてたんだけど」

「薬だけじゃ追いつかないよね、寝たきり……。末期だし。そのために専用の施設を作ってるんだから」

「ああ。医者にもそう言われた。薬だけだと現状を維持させるので精一杯、もしかするとそれすらも無理になるかもしれない。でも、ラシャークへ行くのはもう無理だった。動けないリルナ独りでどうやって行ける？ 行けるわけがない」

「それで、私？」

「ああ。さっきちょっと話した知り合いから聞いて。ただ手をこま

ねいてるくらいなら、駄目元で尋ねてみるって言われて」「なるほど」

故郷で農業をしていて王都へ出稼ぎに来ていたというのなら、その場所はおそらくメイアの西側<sup>しゅち</sup>。それなら“マギン”で張っていたのも頷ける。

「お待たせしました」

そう言って戻ってきたカーマだったが、その姿に見とれる事なくロヘイアはシリアスを貫いている。

明らかに話が終わるタイミングを待っていたかのような登場だったので、ヒイルが一瞥すると、にっこりとした笑みが返ってきた。

「どうぞ。そちらはお下げしますね」

そう言って湯気の漂う暖かい紅茶を差し出されても、軽く頭を下げて受け取るだけに留め、

「これで全部だ」

そう締めくくった。

## 2話 依頼4

暖かい紅茶を一口飲み干したヒイルが、ふと思い出したように顔を上げ、

「ところでロヘアさん、家、どのあたりなの？」

「え…あ、ああ。クロナル平原の南西の方だが」

「……………ほとんど国境。どうやってここまで来たの？ 結構かかるよね、王都まで来るのに」

「歩いてきた」

「は？」

「だから、徒歩で」

あっさりと言われた科白に、その装用の理由がわかったような気がした。

どつりで長旅をしてきたようなくたびれぶりである。

「どれだけかかった？」

「歩くか寝るかしながらで18日」

「頑張りすぎ。でもまあ、うん、愛を感じるね。リルナさんへの「そうですね」

うんうん頷くヒイルに同意するカーマをそのままに、げっほげっほとむせるロヘア。

「い、いや…。別に、そんなんじゃ…」

「別に照れなくても」

「そうですね。知人の娘さんだなんて遠まわしな言い方をせず、恋人と直接言ってもよかったのでは」

「だ、だからそんなんじゃ」

「片思いつて事？ ヨギと同じくらいなのに、それは流石に…」

「ち、違う！ 妹！！ 妹みたいな「よくある科白です。男性はよくそうやって意中の女性をごまかしますものね」

にこりと笑うカーマ。思わず見とれるレベルの美女が微笑んでい

るといふのに、意地悪げに笑っているようにしか見えないから不思議だ。

「いやだから、本当に妹なんだって…義理の。オレの親、13の時に落盤事故で死んじまって、オヤジが引き取ってくれたんだよ。それからずっと家族なんだ。大切な、家族」

緊張感ゼロでにやにやしていた2人の顔が、最後の科白で引き締まった。普通はその前に反応するべき箇所があると思うのだが、微妙にズレている。

「家族、ね」

ぼつりとヒールが呟いた。

「わかった。ロヘイアさんからの依頼は、受けます」

「見てくれるのか!？」

「いいえ」

あつさりと返った否定の言葉は、天国から地獄だった。

「それを判断するのは、私ではなく、リルナさん自身です。ただ、私はここを離れられません」

当然だが、ロヘイアの顔がこわばった。呼べば来てくれるとしてもしくは特効薬でもあるだろうと想像していたのだろうか。

「カーマ。3番の一番上の引き出しにある皮袋を2つと1番の右の引き出しにある小箱を持ってきてくれる?」

「ええ、少々お待ちください」

カーマが席を立ち静かに退出するのを見送ってからロヘイアへと視線を戻し、

「ロヘイアさんからの依頼は受けます。なので、リルナさん自身が私の調剤でもかまわないと判断されたなら、ここへ来て下さい」

「ここへ…この、王都へ?」

「はい。治療はここでおこないます。必要な薬草は全てあるとは言えませんが、不足しているモノはすぐにでも取り寄せが聞く種別なので私の方には問題ありません」

まっすぐにロヘイアを見つめ、

「ただ、問題はリルナさん自身です。その状態も含めて。“シロイ病”の末期症状の場合、その治療には長い期間と苦しみが伴います。根気と体力も必要です。苦痛でしかなく、死を望む人もいる、そういう病です。私は、治したい、と願わない人に手を出すつもりはありません」

最後の科白に口へヘアの顔がこわばった。

「見捨てる、と…?」

呆然と呟やかれた言葉に苦笑を返し、

「世の中には本人が死を望んでいても、薬で体だけは生かしておきたいという強欲な方や、生かさず殺さずという状態でおいておきたいと思う方もいらっしゃいますので。口ヘアさんは違うようですが、それでも。リルナさんがそのまま静かなる眠りを望むのでしたら、私には何もできません。私は医者じゃないんです。ただの薬師ですから」

「……………わかった」

「先ほど話した、治療の際にともなうこともきちんとお話して下さい」

「…ああ」

「後はカーマが戻ってからかな。お茶を飲んで待つてて」

「……………カーマは、お前の何なんだ?」

誰しもが思う疑問である。

「家族」

返る言葉は常に同じ。

「血の繋がりはないけれど、カーマは私にとって大切な家族だよ」

「そうか」

場が沈黙する。

静かな空間に、カップとソーサーの合わさる音が響き、ついで扉がノックされた。

「お待たせしました」

戻ったカーマの手にはヒールが先ほど口にしたように小さめの皮

袋が二つと小箱が一つ。

手渡されたそれを、そのまま口へヘアへと差し出す。

「これは？」

「袋の方は薬。気休め程度にしかならないと思うけれど、リルナさんに。それと箱の方はお金」

「は？」

「往復の馬車代。まあ、帰りは口へヘアさん一人だし、馬でもいいけど。こっちに来るとしたら、徒歩って訳にいかないでしょ？」

「そ、それはまあ…そうだが」

「そのお金は国に請求するから心配しないで」

「戻ってこなかったら…？」

「後で取りに行くからとっておいて。カーマが」

ちらりと視線を送ると、微笑んでいるのに目は笑っていないカーマがいた。

なるほど、財布の紐は彼女が完全に握っているらしい。

「他に質問は？」

「治せる、か？」

「それは見てからでないとわからない。私は、治せるとも、治せないとも、看てもいない人に対して根拠のない断言はできない」

「わかった。ありがたく頂戴する」

そう言って足元においてあったバック　かなりへろへろにくたびれた大きめの皮袋　に、薬とお金をしまいこむと立ち上がる。

「感謝する」

深々と頭を下げる姿に、

「そういうのは、治ってからするもんだよ」

ヒールは肩を竦めた。

「すぐ戻る？」

「ああ、せっかく足代を貰ったことだし、馬を乗り継いで行くとするよ」

「そう。道中気をつけてね。そこで何かあったら、全部、無意味に

なっちゃっよよ

「わかってる」

力強く頷いてきびすを返す。

「お見送りしてまいります」

カーマがその後で、

「ロヘイアさん。薬は用意しておくからね」

去り行くその背にかけられた言葉に返事はなかったが、

「……………間に合うといいんだけど」

独りになった部屋でぼつりと呟く。

「さつて、忙しくなるな……………あー、何だろっ。何か忘れてる気が」

首を左右にかしげ思索するも、特に浮かばず。

まあいいや、と独り言ちて席を立つと、薬草の保管部屋へと向かった。

### 3話 呪令の魔女1

いつか見た光景だった。

きゅ〜つと目を回している珍妙な動物（推定）を見下ろして、ヒイルは大きく息を吐き出した。

前回、そう、あれは確か6日前の事だ。

あの時は夜だった。だというのに、今はもう少して昼食の時間になるという、真昼間である。

「そうそう、“呪令の魔女”だったねえ」

うんうんと頷くヒイルの頭には麦藁帽子、左手に持つは根っこに土が付いている薬草を二株。空いていた右手で思わず目頭を揉むようにして、

「ああ、土がつっ！」

足元に転がるそれにすっかり忘れていたが、調剤に必要な薬草の採取にきていた途中だったのだ。

カーマのしかけた防御結界がしっかり働いている証拠なのだが、前回はじかれていたのにまた同じモノを飛ばしてくるとはどういう見なんだろうか。

馬鹿なのかなあ、など思いながらも一度それを一瞥し、

「……まあいいや。えーっと、後は、カザラスの葉っぱとー、メイメニ〜」

見なかった事にして作業へと戻った。

ぱちんっ。

「あ」

今日何度目かわからない音を耳にし、ヒイルが声を上げる。

カーマはすでに黙止で、ヨギはちらりと天井を仰ぎ見ただけだ。

「しつこいね」

呟いてからプチトマトを口へと運ぶ。

「見てくるか？」

「必要ありません」

あっさりとかーマが拒否して、紅茶を一口含む。

ぱちんっ。

「また」

あきれ返ったヒールの声に、ぱちんっ、と続く。

ぱちんっ。ぱちんっ。ぱちんっ。

「……………連続」

「見てきた方がいいか？」

げんなりしたヒールの声に、面倒そうにしながらもヨギが提案し、2人の視線がカーマへと集中する。

黙止を決め込み穏やかな笑みを浮かべて優雅に紅茶を飲んではいるが、何故だろう。背後に怒りのオーラが見えるような気がする。

「必要ありません」

もう一度、同じように告げたカーマの後に、ぱちんっ。

「何だか拗ねた子供が石投げてるみたいだねえ」

うんうん頷く。

「ねえ、カーマ」

「はい？」

「侵入警報、ちょっと変更できるかなあ？」

ぱちんっ、と音が続く中そんな提案をするヒール。

「変更といたしますと？」

「ほら、もうすぐお客さんが来るでしょ？ここに住む事になるから、こんなしよっちゅう音が鳴ってたら落ち着かないんじゃないかと思って。それでなくとも養生が必要な人な訳だし」

「そういえば…。今までそんな事なかったから気にもしなかったけれど、そうよね。反応は私とヨギにわかるように変えておくわ」

「って、私は!？」

「調剤中はどうせ聞こえないのだから、いらないでしょう？」  
「う……………」

げふげふ、とわざとらしく咳き込んでごまかしにかかるBGMは、  
ずーっと続く、ぱちんっぱちんっ。

「しかし、カーマ。ヒイルが独りこの家に残っている時に何かあつたら問題じゃないか？」

「それもそうね……。でも、大丈夫よ。警戒音が鳴る程度なら問題はないし、仮に侵入を許せばすぐにわかるから。どうにでもなるわ」

口元でうっすらと微笑む。整いすぎているその美しい顔でそうされるると、恐ろしさを感じてしまうのは何故だろうか。

「じゃ、じゃあ、変更しておいてね。多分、後4〜5日くらいで来ると思うから」

へろりと笑って告げられた科白にヨギが一瞥し、

「どんな予測だ、それは」

「予測じゃないよ。カズちゃんに頼んでたから」

ヒイルの口から出た名前に、眉間に寄った皺をそのままにヨギは目頭を右手でもむ。

「最近見ないと思っていたら、お使いに出ていたのね。渡したお金が無駄にならなくてよかつたわ」

気にした風でもなく告げるカーマに、ヨギがげんなりと息を吐き出した。

「時々思うのだが……。カズエイダルは、カーマの使い魔だろうに。

何故お前に黙ってヒイルの頼みを聞いてるんだ？」

「確かに使い魔契約はしてますけれど、制限は特にもつけていませんから。それに、カズエイダルには、この家の使い魔として役目を与えているので、あなたの依頼も聞いてくれますよ。ヨギ」

「……………そうか」

以前、そんな話を聞いたような気がすると思いつつヨギはミルクを飲み干した。

彼の中での常識

多分に一般常識と同じだと思っただが、

は、使い魔というのは己が契約した主の命令だけを受け入れる存在だと思っていたのだが、そんなモノは関係ないらしい。

尤も、この家では多々ある常識が覆されまくっているので、今更だったりする上に、その覆されている常識の中の一角を担っていると自覚が皆無のヨギであった。

「止まったねえ」

食後のお茶をしながら雑談している間に、拗ねた突撃(?)は終了したらしかった。

もしくは、侵入を許した可能性があるという事なのだが。

「このまま今日は来ないといいのですが。夜中にこんなに音を立てられ続けたら迷惑以外の何者でもありませんから」

心底面倒そうに呟いたカーマに、どうやら前者だったようだとして人は肩をなでおろした。

### 3話 呪令の魔女2

侵入警報が変更されて2日後。

それは二枚盾が留守中、お約束どおりに現れた。

「どうすればいいのかなあ……」

ぼつり、と咳く。

しゃがみ込むヒールの眼前、結界の向こう側には侵入に失敗した輩が倒れている。ちなみに、警報音が聞こえてないため、いつからそこで気絶しているのかは不明だ。

発見がうらかな午後というだけで。

ヨギは磨ぎに出していた愛剣を取りに東へ行っていて帰宅予定は夕方だし、カーマは買物に出ている戻りはティータイムに合わせただ。

完全に独りきりである。

いや、厳密に言えばカーマの使い魔が2体いるから独りきりではないのだが、2体とも戦闘タイプではないため戦力には数えられない。

とはいえ、結界に阻まれて失神しているのだから心配は皆無だろうが。

「呪令の魔女」とは別口なのかなあ。呪いとは縁遠いだろうし……」  
考え込むように暫し頭を軽くかいてから、何を思ったのか足元の土を少しだけ握って土団子を作ると、

「第一弾、投下」

弧を描くようにして標的へと放り投げた。

酷い。

しかし何の反応もなかったため、

「第二弾、投下」

一度目より、二周りは大きい土団子だった。

「……っえ」

お腹辺りだったのだが、いいところに入ったようで小さなうめき声と身じろぎが続く。

眉間に思いつきり皺を寄せた顔でうつすらと目を開き、数秒間そのまま固まってから、

「つて、くそ！ 明るっ!？」

叫び声をあげながら上体を勢いよく起こして、頭から落ちた。

「…つてえ」

「そりゃ、それだけ勢いよく頭から落ちればねえ。大体、気絶してたのにいきなり起きたら目が回るのくらいわかりそうな気がするけど」

「うるせ…つて、え、は!？」

結界を挟んで、初めて目が合う家主と侵入者だった。

片や地に倒れた上体で見上げ、片やしゃがみ込んで覗き込むようにして。

「こんにちは」

「こ…は？ え？」

「いつからそこで寝てたの？」

「…んな、答える筋合い ないから別に答えなくてもいいけどねえ」

がばつと体を起こして向かい合うようにして告げた科白は、ヒールのへろ〜つとした声で遮られた。

「で、何か用？」

「入れる!」

「いや、お客さんなら正面から入ろうよ」

「入れないからこうしてっ!」

「まあ、悪意を持つてると遮るようになってるらしいからねえ」

暢気な科白に、思いつきり頬が引き攣ったのは仕方ないのかもしれない。

「それにしても、こんな都会で珍しいね〜」

「は？ 何が？」

「いやいや。いくら外れとはいえ、王都のすぐ傍で獣人に遭遇するなんて、そうそうない経験だと思って」

ニコニコと告げられた言葉に、時間が止まった。

「な、何で……」

あからさまに動揺した声が返り、ヒイルはきよとんとしてその姿を眺める。

「そんな耳してたら子供でもわかると思うけどな」

ちらりとヒイルの視線が上へとずれるのに合わせて、固まった顔のまま自分の頭へと両手を伸ばし、

「何で!?!」

叫んだ。

「うん?」

「変化は完璧に……っ!」

「気絶するほどの勢いで結界に弾かれたせいで解けちゃったんじゃないの?」

へろりと告げられた科白に、はっきりわかるレベルで落ち込んだ。犬のような大きな耳がへによっとしおれ、全身で項垂れている。

しっぽもあるんだろうか、などと思いながらそれを見守るヒイル。相変わらず緊張感の欠片もない。

いいんだ、どうせ、などとブチブチ繰り返す犬耳の、多分少年。

獣人だけに年齢と見た目がかみ合っているかどうかは種族によりけりで断言は出来ない。

「……………それで、何の用なの?」

一向に浮上する気配がないため、待つのに飽きて問いかける。

「……………ここにいる薬師に用が」

「私」

「は?」

「ヒイル・クロードは、私の名前だよ」

あっさりとした自己紹介に返った反応は、よく見るモノだ。名乗った際に大体7〜8割の確立で。

こげ茶色の瞳をいっばいいっばいに見開いて凝視して来る姿に、ヒールは軽く眉を寄せる。

「それで？」

不満はあれどありきたりな反応なので、話を進めることにした。

「お前が…？ 嘘付け！ 凄い美人だつて聞いたぞ！！ それにお前みたいな子供にこんな結界張れるわけないだろっ！！」

力いっばい、色々失礼である。

「嘘じゃないし、混じってるみたいだから訂正すると」

「だいたい堂々と商売できるのクスメイアは15からだろ！ お前どー見ても年が足り…っ！！」

半目になって殺気のコもった視線を投げられて、言葉を飲み込むのほほんとしていただけに、この代わりようは異様な恐怖を感じさせる。

「私、20代だから」

こくり、と生唾を飲み込んだ耳に届いたのはそんな科白だった。

は…？ と思っていると、ヒールの半目がおさまると同時に剣呑とした空気がやわらぎ、

「それと結界とかは、カーマだよ。凄い美人なのもカーマ。どこで話を聞いたのかしらないけれど、混ざってるみたいだね」

「……………は？ え、お前、本当に、本物？」

「そう」

「暗殺者を返り討ちにしてる凄腕の魔法使い、なんだよな…？」

「それカーマかな」

「剣の使い手…？」

「それはヨギだね」

「……………お前、は？」

「薬師だよ」

あっさり返ったのは一般人でも知っているヒール・クロードの代名詞だ。クスメイアの薬師、と呼ばれているのだから。

「……………そう、か」

「うん」

にへらと頷くヒイルをまじまじと眺め、犬耳が折れると、少年は「はああああ」とやたら大きい溜息を一つ。

「その、カーマってヤツは？」

「外出中」

「そつか。なら…」

「この結界、君じゃ破れないよ」

「…わかってる」

引き攣った顔で同意する。自覚していても言われなくなかったのかもしれない。

「お前をどうここの前に、やらなきゃならない事があるってわかった」

「それで？」

「出直す」

「いや、もう来なくていいよ」

へろつと告げたヒイルに、米神に青筋が立った。

「覚えてろよ」

「そう？　じゃ、名前は？」

「はあ！？　誰が名乗るか！」

「いや、名前も知らない人のことイチイチ覚えてるほど余裕ないから。暗殺ギルドのおかげで色々な人が来るしねえ」

ひらひらと掌を振るヒイルに、更に青筋が追加されていく。

「後で絶対、殴る」

「カーマに勝てたらね」

怒りで震える声に返ったのは、絶対の信頼をよせるカーマの実力を知るがゆえの自信だ。

「ところで君は、“クエンロッド”の人？」

「違う。オレは…って誰が言うか！！」

「否定はしちゃってるけどねえ。まあ、いいけど」

ちらりと視線を家の正面の方へと向けて、

「出直すなら早くしないと、カーマが戻ってくるよ」  
そんな科白を口にする。

「オレを見逃したこと、後悔させてやるからなっ！」  
「嫌」

捨て台詞のつもりだったのに短い答えが返ってきて、勢いよく地を蹴ろうとしていたためバランスを崩して顔面をしたたかに打ちつける。

結構な音がしたので振り返るとそこには、く、の字に芋虫みたいになった姿。

「……………もふもふ尻尾もあつたんだねえ」

口を付いて出たのはそんな感想で、犬耳の少年は無言で体勢を立て直すとそのまま飛び去っていった。

静かになったその場所で、ヒイルは思案するように首を左右にひねり、

「“呪令の魔女”が本気になった、かな…?」  
ぼつり、と呟いた。

### 3話 呪令の魔女3

「 ……と、いう事があったよ。注意した方がいいかな?」

「そうですね。警戒だけ強めておきます」

「いつ頃だったの?」

「明け方ですね。ヒイルが裏で朝露のある薬草を取りに行っている時です。気にする必要はない程度だったので、そのままにしておきましたか…」

ふう、と小さく息を吐き出す。

「まさか昼過ぎまでいたなんて。ヒイルが起こさなかったら、いつまで寝てたのかしらね」

しみじみと呟いてから紅茶を飲み干す。

「それにこの辺りで獣人なんて、本当に珍しいですし」

「だよねえ。私、種族とかわからないから何って言えないけど」

「…ヒイル」

「何?」

「そこは勉強た筈なので、種族名をわかって欲しい所だったのですが…」

苦笑するカーマに視線をそらし、

「ごめん。…でも、このクッキー、本当に美味しいねえ。手作り感に溢れてるけど、カーマが作ったら形も綺麗にするでしょ? どうしたの?」

「マギンで頂きました。息子のザザル君が作ったそうです」

「へえ…。そっか、もう…10才だもんね。そのうちお店の手伝いもするようになるかなあ」

マギンとの付き合いのきつかけになった少年の姿に思わず顔がほころぶ。当時はまだ幼さを残していたし初対面が病床とあってか弱いイメージだったが、最近はすっかりわんぱく盛りのいたずらっくに成長していた。

「そうなりそうですね。クッキーが上手に焼けるようになって、マギンの商品を全て覚えて、一度に受けられるオーダーが5品を越えたらお店に出てお手伝いするそうですね」

「なるほど。…というか、10才児に求めるにはちょっと条件が厳しいような気がするけど」

「それは仕方ないでしょう。マギンの店としての格を落とすわけにはいかないでしょうから。たとえ息子さんといえど。それに、将来お店を継ぐのだとしたら、甘やかす訳にもいきなんでしょうし」

クスクスと、何かを思い出したかのようにカーマが笑う。

「そうだねえ。……って、何を笑ってるの」

「いえ。ヒイルが昔、私もやる、と言って走って行って穴に落ちたのを思い出してしまって」

「っ!?! ちょ、そ、そういうのは忘れて!!」

父親がしていた植樹作業 趣味なのだが を手伝おうとして、樹木の植え替え用に掘られた穴にいつそ気持ちいいほど見事に落下した事がある。

何度か。

ヒイルが4、5才の頃の話で、飛び越えるだけの運動神経が培われた後は落ちなくなつた。笑い話になつていいるのは、何度も繰り返した事と、一度も大怪我をしなかつたからだ。

更に、お姉さんなカーマは当時の事をよく覚えていいる。

「ふふっ。ヒイルの植物好きの原点は、きっとそこですわよね」

穏やかに、本当に穏やかにカーマが微笑む。

「むう……。でもあの頃って……カーマ、今みたいに笑つてなかつたよね」

ぼつりと呟いたヒイルに苦笑が返る。

「あの頃はまだ……あら、お客様ですわ」

「そう? じゃ、私が出るね」

ヒイルには警戒音が聞こえていないため来客者の判断がつかない筈だが、そう言いながら立ち上がる。

「では、お願いします。私はお茶の用意をしておきますね」  
にこりと微笑んで出迎えを頼む。普段はカーマの役目だ。案内も  
しかり。

「ここでいい？ 応接室の方がいい？」

「こちらで大丈夫です」

「わかった」

頷くと、きびすを返す。

完全なプライベートルームであるここに通すのを許可されるとい  
うことは、友人知人の中でも相手が限られてくる。

誰だろう、と思いつながら玄関へと向かうヒールの耳に、ビーツと  
呼び出し音が響いた。

「はいはい。今でますよー」

などと返事をしながらも急ぐ気はゼロだ。

住人が3人しかいない割に結構な広さを誇るこの家は、よほど運  
がよくない限り、呼び出し音の直後に扉が開かれる事はない。知ら  
ない者からするとイラっとするかもしれないが、今回の客人はそれ  
を知っている相手だろうと予想して、のほほんと普通に歩いていた。

「いらっしやいませ」

年相応に見えないと10人が10人口を揃える笑顔で扉を開くと、

「…って、キリさん。こんにちは」

「こんにちは。ヒーちゃん」

「……………今頃珍しいですね」

嫌な予感しかナイんだけど、という科白をヒールは飲み込んだ。

「ちょっと心配になって」

「また何か…？」

「いや、そうじゃなくて。ヒーちゃん、賞金額が一気に…」

どんよりと落ち込んだヒールを前にしてはそれ以上の科白を続け  
るのは無理だった。

「それで心配になって様子を見に来てね。勿論、ここにいる間は絶  
対に大丈夫でしょうが…。カーマはいないのですか？」

普段なら出迎えてくれる美女がいる。彼にとって心地よい癒やしと有意義な時間をくれる数少ない相手だ。

「お茶の用意してるよ。キリさん、私を餌にして目的はカーマ？」  
「両方です」

にこりと微笑む。

溪谷の美女と噂された母親譲りの美貌は30を過ぎて、色気をさらに増した。何人もが、男にしておくのは勿体無いだの性別を間違えて生まれてきただのと口を揃えているのだが、ヒイルからすると別にそんな印象は受けない。

カーマの影響恐るべし。

「……………ま、キリさんだしねえ。どうぞ」

「心外だなあ。ヒーちゃんの事も気にかけてるのに」

「も、ねえ……………」

「何かお役に立てれば、とも。オレは助けられてばかりだから」

「キリさん自身を助けた記憶はないけどねえ」

「間接的に大助かりだよ。色々」と

含みのありすぎる追加に、ヒイルはげんなりと息を吐き出した。

「キリさんって本当に、黒いですよねえ」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「つまり……………そのくらいでないと、生活できない場所なんですね。怖いところですよ」

「そうなんだよね。だからヒーちゃんってば巻き込まれて大変な事になっちゃって」

「……………ですよね」

「本当に悪いとは思ってるよ、出来れば巻き込みたくなかったからね……………。ただあの時は他にどうしようもなくて、見過ごす事もできなかった」

「仕方ないでしょ、それがキリさんの仕事だし。優先順位の問題だから」

「命の重さは同じだよ、皆ね」

「でも民間人の私を巻き込んだ」

じと目で自分を睨み上げて来る姿を見下ろして肩を竦める。

「この国で一番安全だからね、ここ」

「王宮の方が安全じゃないんですか？」

「あそこは内側にも敵をかかえてるしね。暗殺未遂がごろごろして  
る時点で安全度は低いでしょ？」

「……確かに」

「何なら世界一安全な場所、と言っても」

「それは流石に大げさかなあ……」

笑いながらノブへと伸ばしたヒイルの手が空を切り、扉が開かれ  
る。

「だからと言って、ヒイルを危険に巻き込むのはいただけませんね」  
恐ろしい笑みを称えたカーマが立っていた。

「そこは本当に申し訳なく思っています」

「出来ることがあつたら、とおっしゃってましたね」

「流石に筒抜けなんですえ」

思わず肩を竦めて、この家の主よりも主らしい姿を眺める。

「ギルドの登録を抹消して下さいませ」

「流石にそれはオレには……」

「国家権力を持ってすれば可能でしょう」

「私的有用は出来ません。そもそも、オレにそこまでの権限ないの  
で」

「アナタが睨むか笑うかすれば動く人間はいくらでもいるでしょう  
に……」

「はあ、と溜息一つ。」

「後々面倒なのでそういつた事はしません」

「使えるモノは何でも使わなければ勿体無いですわ。とはいえ、他  
人と余り関わりたくないアナタにそれを求めるのは酷というもので  
すか。…上手く立ち回れるようになれるよう訓練すべきと思います  
けれど」

「カーマほどの卓越した熟練者になるまでどれだけかかるやらって話ですねえ」

ふふふ、と美人が向かいあって微笑みあう。

壮絶な光景だ。

何も知らなければ、それに見とれてしまいそうだが…。

「黒い」

ぼつりとヒールが呟いた。見慣れてしまったので動揺はしないが、始めてみた時には流石のヒールもその場から逃げ出したくなるくらいには恐怖したものだ。

「ほら、いつまでも立ち話してないで。続きは中で！」

両手を腰に当てて、肩幅に足を開いて胸を貼る。精一杯力を込めたつもりだ。本人は。

「それもそうですね」

やんわりとカーマが微笑み、

「ようこそ、キリウ様」

客人を迎える際の最上級の礼でもって相手を迎え入れた。

### 3話 呪令の魔女4

ある意味では、その結果を予想する事は出来たかもしれない。それなのに何故、そこに思い至らなかったのか、別に後悔はしな  
いが気付けなかった事に対して割とへこんだりしたものである。

この家に住む3人は。

「あら」

突然、カーマが驚いたような声を上げた。

時々黒くなる空気にヒイルが微妙に引き攣ったりしながら、談笑  
していたまさにその時である。

「どうしたの？」

「件の獣人ですわ」

「へ？ またかかったの？」

「ええ」

「その獣人、かなりまぬけなんですかねえ。もしくはその主が、か  
な？ 少々、顔を見て見たくなったのですが」

「意識はあるようですし、会話を……。あらあら」

くすり、とカーマの笑みが濃くなった。黒い方へ。

「私と話をしたいようですわ。ふふふ。ヒイルまで呼びつけるなん  
て上等ですわ」

「……………なんだろうねえ？」

前の去り際にはそんな空気はゼロだったので、ヒイルは首を  
傾げる。

「キリウ様。ここにいるのを知られるのはまずいのではないでしょ  
うか？ おそらく、クエンロッドか呪令の魔女の手の者と思われま  
すので」

「そうだねえ。まあ、その原因が原因だから、問題はないと思うよ」

「それもそうですね。此度の一件に関してはキリウ様を筆頭に、役立たずばかりだったからですものね」

「言い訳のしようがありませんね。…ところで」

さつと先に立ってドアを開くとヒイルとカーマが通り過ぎるまで押さえておく。

「ヒーちゃん、相談があるんだけど」

「お断りします」

廊下を進みながら話かけたキリウの言葉をざっぱりと切断する。

「キリさんのお願いとかが相談ってロクな事にならないし」

「悪い話ではないですよ。先の反省を生かして、専門の薬師と今の薬草園の他にもっと大きいのを設置する事になりました」

「今更？」

ヒイルとカーマが同時に声を上げる。

「ええ。そこで薬草園の建設にあたってヒーちゃんにアドバイスを貰えれば、と」

「なるほど。それならいいよ」

「助かります」

「キリウ様」

にこり、とカーマが黒い笑みを浮かべる。

「何か？」

「これにかこつけてヒイルに薬師の方も何とかさせようと考えてはいないでしょうね？」

「流石です」

キリウから返ったのは短い言葉と苦笑だった。

「やはり」

ふう、とため息を一つ。

「薬草園の方に口出しするから、最初の頃は手伝っよ」

「助かります」

「ヒイル…、そんな事を言っつて。キリウ様の事、油断はダメですわ」

「そこは大丈夫だよ。キリさんだって、カーマを敵に回す気はない」

だろうから」

にへらと気の抜けた笑みを浮かべる姿に、美人2人は顔を見合わせてからそつと息を吐き出した。

腹黒いと言われる2人だが、天然でそれをやってのけるヒールに割と振り回されたりしているのが現実だからだ。

「でもどこに作るの？ 西のこつちで王城付近に空き地ないよね」  
「城内です。先代の名残で後宮にある今は使われていない別邸の一つを潰します」

「勿体無いなあ……」

「血みどろの惨劇跡地で、その後は開かずの邸でしたからねえ」  
しみじみと呟いたキリウに冷たい沈黙が返った。

「先代の王様つてそういう話が多いね……」

「だから兄弟の数が異常に多いんですよねえ。よく王位争奪戦が起こらなかつたと当時は感心したものです」

「……人事だねえ、キリさん」

「人事ですからねえ」

「早々に継承権を放棄し、外から眺めていた訳ですか」

「ええ、と言いたいところですが」

カーマの言葉に頷くかと思いきや肩を竦めて、

「割と早い段階で弟妹揃って、<sup>リカルド</sup>長男に押し……まかせようという流れになつていましたからね」

「長男つて大変だね……」

「押し付けようと思つていたのですね、幼心に」

軽く引いた2人だった。

「自分達の親のドロドロしたものを見せられて育てば、歪むか達観するかどちらかでしょう。オレ達はそのどちらかで。おかげで陛下の婚期が遅れて後継者問題が起きるところだったんですから」

10年ほど前に女性恐怖症を乗り越えて　まだ完全に克服は出来ていないらしい　やつとの初恋をしたリカルド国王はその翌年に意中の女性を王妃へと迎え、現在、2児の父である。

その弟妹17人はキリウも含めて半数以上が未婚のままという状態だ。

「継承権についても、オレの他にも何人も放棄してる兄弟はいるしねえ」

しみじみと呟く18人兄弟の10番目。

「普通だと、オレが王様になりたーい！ って言ったり、周囲の人間が暗躍したりして、大変な事になりそうな状況なのに不思議だねえ」

「……………それだけ、先代の時の状況が酷かったって事だよ」  
果てしなく遠い目をしていた。

政治的能力は高かっただけに叛乱も起き難く、起きたとしても早期に鎮火されていたのだという。女性問題以外は非常に有能だったらしい。その一点だけが子供達やら他の重鎮達に王位争奪戦という言葉をお忘れさせるくらいに極悪だったようだが。

「むしろ、よく18人も無事で生まれてきたというか…生まれたというか…」

ぶつぶつと呟く姿は、クスメイア国第一級魔法使いという身分を考えると呪いをかけているようにも見えた。

「でも私は一人っ子だから、兄弟がたくさんいるのってちょっと羨ましいよ。カーマも妹がいるし」

「そうなんですか？」

「ええ、妹が2人」

「……………傾国の美女が他に2人いると思って間違いないですかねえ？」

「ふふつ。私などまだまだ」

意味ありげに笑うカーマに、キリウの頬が引き攣る。

「カーマの妹も美人だけど、カーマほどじゃないよ。系統が違うしね」

「系統？」

「上の妹さんは活発系で、下の妹さんは可愛い系。まあ、美人なの

は確かだけど」

「落ち着きが足りないのと、大人になりきれないだけですわ」

カーマは微笑みを浮かべたままでばつさりと評した。

「なるほど。完璧な姉、ですか…。それでいくと、オレ達はぐらぐらしてる長男でよかつたのかもしれないねえ」

国王としては駄目だろ、とどこからか声が聞こえそうだった。

「おかげで弟妹の団結ぶりは半端ないね。大半が自分が王位に着きたくないからだろうけど」

「キリさんもでしょ？」

「他の王族が全滅とかにならない限り飛び火しない立場だからねえ」  
継承権を捨てた上で、政治に直接関わりない国の重要ポストに付いたのはそのためである。本当なら好き勝手に魔法の研究をしていたかったのだが、勝手に身内が次々暗殺されるような事になってはお鉢が回ってきてしまう可能性があるからだ。身内を保護し守護する事は、己の自由を守る事にも繋がっている。

「やっぱりキリさんって黒いよねえ」

「有り難うございます」

「いやいや、そこお礼言うのおかしいから」

「2人ともそのくらいで」

暢気な会話をカーマの静かな声音がさえぎった。その調子に、ぎくり、と2人の顔が強張る。

「目的を忘れてはいけませんわ。2人も話が弾むとどんどん脱線していつてしまうのですから…。さて、何が出るか、楽しみに眺めるといたしましょう」

にこりと、背後の2人を振り返ると無言でコクコクと頷きを返してきた。

「ふふ。獣人の種族も何なのか興味がありますし」

何故か上機嫌だがカーマの笑みはとても黒かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8785s/>

---

薬師

2011年8月16日03時10分発行